

東海・北陸ブロック

1.プログラム詳細

【日程】

<1日目>

13:00~13:30	(30)	受付
13:30~13:45	(15)	開会 <ul style="list-style-type: none"> ・主催者挨拶：内閣府政策統括官（共生社会政策担当） 小野田 壮 ・来賓挨拶：石川県参事兼生活環境部 次長 伊藤 信一 ・歓迎挨拶：石川県交通安全母の会 会長 能木場 由紀子 ・講師、コーディネーター等紹介
13:45~14:45	(60)	講演 「高齢者(運転者も含めた)に対する交通安全の動機づけ」 千葉大学 名誉教授 鈴木 春男
14:45~15:00	(15)	休憩
15:00~16:10	(70)	活動事例発表 三世代交流交通安全フェスティバル in となみ 砺波市交通安全母の会連合会 会長 大楠 匡子 「ただいま！」元気な声を聞きたくて・・・ 金沢市交通安全母の会 前 千代子 交通弱者への交通安全教室 福井市交通安全母の会 会長 下田 須栄子 交通安全活動啓発物品の作製について 岐阜県交通安全女性協議会 会長 各務 茂美ほか 子どもに対する交通安全活動 静岡市交通指導員会 会長 青木 昭 「愛知県交通安全母の会」交通安全啓発活動について 愛知県交通安全母の会 会長 日光 直子 心に染みわたる教育を地域の隅々まで とまとーずの交通安全教育 松阪多気地区交通安全対策会議 石井 ひろみ
16:10~16:20	(15)	事例発表に関する質疑応答
16:20~16:50	(30)	グループ別交流（自己紹介及び役割分担検討）
16:50~17:00	(10)	事務連絡

<2日目>

8:30~9:00	(30)	受付
9:00~10:00	(60)	講演 「“地域の安全は、人々との笑顔から”」 金沢星稜大学 人間科学部 教授 池田 幸應
10:00~11:15	(75)	グループ討議(3テーマ、4グループ) 1班:高齢者に対する交通安全活動における課題と対応 2班:高齢者に対する交通安全活動における課題と対応 3班:子どもに対する交通安全活動における課題と対応 4班:自転車の交通安全活動における課題と対応
11:15~11:35	(20)	グループ討議結果発表・全体討議及び意見交換
11:35~11:50	(15)	講評(コーディネーター 鈴木春男先生)
11:50~12:00	(10)	「高齢運転者等の事故防止等について」:内閣府
12:00		閉会

2. 講義等の記録

【1日目】

講演

「高齢者（運転者も含めた）に対する交通安全の動機づけ」

千葉大学 名誉教授 鈴木 春男

114 ページの関東ブロックでの講演録参照。

活動事例発表

「三世代交流交通安全フェスティバル in となみ」

砺波市交通安全母の会連合会 会長 大楠 匡子

まず、富山県砺波市について説明させていただきたいと思います。人口は4万8,000人、面積は127.03平方キロメートル。特色としましては、チューリップ球根の生産が日本一、散居の景観で有名、そして、住みやすさランキングは昨年2位という砺波市でございます。

さて、今回この「三世代交流交通安全フェスティバル in となみ」の目的を申しますと、砺波市は北陸高速自動車道のスマートインターを含めインターを2つ持ちまして、道路整備も大変進んでおります。また、一昨年オープンした大型商業施設の影響等により交通量が増えていることなどから、交通事故件数は県内でも多い状況にあります。そこで、砺波市が力を入れている三世代家族が集まり、交通安全について学ぶ場を設けることにより交通安全意識の一層の向上を図ることを目的として、この事業を実施いたしました。

第1回実行委員会を7月21日に開催いたしました。砺波市交通安全母の会連合会役員が5名、砺波市交通安全協会事務局長が1名、砺波警察署交通課長、砺波市老人クラブ連合会から2名、そして、砺波市生活環境課の職員2名の11人で開催いたしました。

この日はフェスティバルの内容について大枠を決め、実施日時を平成28年10月22日午後1時半から4時、実施場所については大変協議したところでございます。市内には小学校が8校あり、そのどこかの地域に限定して実施することも考えたのですが、今回は三世代交流ということもあり、砺波市内全域から参加者を募ろうということで、砺波市の町の中にある出町子供歌舞伎曳山会館で実施することといたしました。

対象は200人となりましたが、高齢者世代が66人、親世代が50人、子ども世代が76人、

合計 192 人の方に来ていただいたところでございます。

プログラムは、開会セレモニーに続き、交通安全宣言、富山県警察音楽隊による演奏、反射材ファッションショー、そして、体験学習、夜間視認性体験、自転車シミュレーター等を準備しました。また、事故セイバーとのじゃんけん大会、交通安全クイズ、交通安全落語と、少し欲張り過ぎたような内容となったところでございます。

さて、いよいよ実施日当日、砺波市交通安全母の会としてオレンジ色のベストを作り皆で着用しました。

開会式には、来賓として砺波市長、砺波警察署長、そして交通安全協会長さんに来ていただきました。

ご挨拶の後、最初に交通安全宣言を行いました。子ども世代、親世代、そして祖母世代、高齢者世代の宣言文をそれぞれ読み上げていただきました。

その後、警察音楽隊による演奏を聞きました。大変狭い会場でありましたが、交通安全のダンスなども交え、そして、オレオレ詐欺に気を付けましょうというコントも交えながらの大変楽しい演奏を披露していただきました。ここ出町子供歌舞伎曳山会館は昔の芝居小屋のようなところで、2階に栈敷席があり、会場は満席でありました。

続いて反射材ファッションショー、反射材の付いたベストを着て、傘、袋などをもち、暗くするとどう反射するかということで行いました。

各種の体験学習としては、白バイに乗車しての記念写真、自転車シミュレーターの体験を行い、その後、事故をしないぞという事故セイバーとのじゃんけん大会を行いました。

それから、メインの交通安全クイズを行い、第1問から第5問まで、会場にいる皆さんと一緒に考えるという形のクイズを○×方式を進めたところであります。

最後に交通安全の落語を聞き、閉会ということになりました。

参加者からのアンケート調査結果（親・祖父母世代で54枚）から、「子どもと楽しく交通安全を学ぶことができ良かった」、「交通事故から子どもを守ろうという気持ちが高まった」、「交通安全を意識した」という大変前向きな感想をいただきました。

また、子ども世代のアンケート調査からは、「交通ルールなどの大切さがわかった」、「親・祖父母と楽しく過ごせた」などの感想を寄せられたところであります。「退屈だった」というご意見もありましたが、行事に対する満足度は高かったのではないかと考えております。

実施の効果・反響としましては、やはり反射材ファッションショーはインパクトがあったかなと考えております。また、交通安全クイズは子ども世代、親・祖父母世代とも交通

安全意識の向上につながったと思っております。

砺波市は、三世代同居に大変力を入れておりまして、参加いただいた市長からもこの事業はとても良いとの評価をいただきました。

しかしながら、問題点もありました。実施場所を小学校などにせず、砺波市街地にある公共施設としたことで、市内全域から参加者を募ることになり、かつ、施設の収容人数が最大で250人ということで、どこまでPRして良いのかというような葛藤があったところでもあります。また、施設の関係で、体験学習の場所が広くとれなかったことも問題点となりました。

今後の改善点としましては、小さい子どもも多く参加していたので、子どもが飽きないようなプログラムの内容や順番、そして、体験コーナーを充実する必要があるなと感じました。

また、富山県では三世代交流交通安全とセットで、高齢者ふれあい訪問も実施しております。私どもは28年8月21日、22日と85世帯を訪問し、広報チラシや反射材をお配りしたところでもあります。

高齢者や子どもの故が後を絶たない昨今、三世代で交通安全について学び、体験するこのような場を設けることができ本当に良かったと思っております。このような三世代の体験型学習は、是非これからも続けていきたいと思っております。

「ただいま！」元気な声を聞きたくて・・・

金沢市交通安全母の会 前 千代子

皆さん、こんにちは。石川県金沢市へようこそ。今から石川県金沢市交通安全母の会の活動発表をいたします。私たち金沢市交通安全母の会では、金沢市校下婦人会連絡協議会、交通安全委員会を中心に交通安全について活動しています。

交通安全お守りマスコットを年間何と5,000個を各校下婦人会で作製しています。交通安全の祈願を済ませ、新小学1年生や高齢者の方々へ贈呈しています。さらに、交通安全教室を開催し、地域でのさまざまな啓発活動につなげています。交通安全マスコットの歴史、交通事故に遭わんの「あ・わんちゃん」、交通事故防止の「ぼうしくん」、そして、現在は無事に帰るの「かえるちゃん」です。その時々には会員が心を込めてつくってきました。いつでも合言葉は「気い～つけてね！」愛の一声事故防止です。

これまでの自転車についての学習の経緯をご紹介します。23年度に自転車マナーア

ップの啓発をスタートいたしました。24年度には金沢市公共レンタサイクル「まちなり」の調査と提案をいたしました。そして、25年からは自転車が安全に走れる街づくりについていろいろな面から学習することを目標といたしました。自転車に注目した学習の発端は、金沢市の公共レンタサイクル「まちなり」がスタートしたことでした。金沢市の公共レンタサイクル「まちなり」知っとるけ？ 2012年3月に金沢市が始めた「まちなり」です。「まちなり」事務局を訪ね無料体験をし、さらに、利用している観光客にインタビューも実施しました。かごの大きさやポートの場所の案内など、いろいろ提案いたしました。そんな中で、金沢の町並みを楽しむためにも、歴史と文化と人の優しさ、思いやりが大切だということでした。「まちなり」を担当する金沢市の歩ける環境推進課でお話を伺いました。「まちなり」とは町中の賑わいのためにも環境に優しい自転車は大切な観光地の交通手段です。今はやりの共同利用、シェアするということですね。スタート当初は認知度も低かったのですが、新幹線の開通後はぐんぐん増えています。最初は521人、平成28年は7万2,344人の方が利用されています。「まちなり」の今です。ポート、それから、自転車がこのように並んでいます。ここにガチッと入れると、それで1回返却になります。30分で次のポートまで行くということになっています。1日200円、1回200円の利用で30分ごとに乗り捨てみたいな状態でシェアするということになっています。今では多くの観光客に認知され、利用されています。ホームページやガイドブックを見て利用されました。とても使いやすいと好評でした。「まちなり」の今後の展望としましては、平成29年度に今の公共レンタサイクルの「まちなり」の運営事業者の協定期間が終了するというので、検討委員会を設置されたそうです。これからもどんどん変わっていく、利用しやすい「まちなり」になってほしいと思っています。

また、自転車専用通行帯の調査をしています。東金沢駅付近の国道ですが、ここに専用道路、通行帯があり、ここで大変危険な状態が見られました。ちょっと写真が見にくいかもしれませんが、この車は私の車の前を走っている車です。この信号に差しかかって青信号になったのですが、ここにたくさんの高校生が通学しています。東金沢駅で降りた学生がここで自転車に乗って学校まで走っています。一斉に青信号で渡ろうとするものですから非常に混み合っ、この車で2台目くらいだったのですが、曲がり切れない。そうすると、今度は向こう側から直進して右折しようとする車が交差点に入って曲がれない、取り残されるような状態になるということで、非常に危険であるということをして石川県の県政会議金沢地区大会で発表いたしました。危険を察知していただいて、改善していただくようお願いしました。そうしたら、自転車専用の信号機が設置されました。自転車専用の信

号で、早く赤になるので、その後、自動車は安全に左折・直進ができるようになり、安全が確保されました。金沢市は自転車走行指導帯を設置しております。最初はこういう感じ、これは橋場町から鳴和方面です。高校生が順序よく上手に走ってくれています。高校生もそんなに態度の悪い子ばかりではないなと思っています。NHKのニュースの画面ですが、自転車走行指導帯の取り組みということで、今ここに赤い線の引いてあるのが全部走行指導帯です。金沢市内の浅野川と犀川に挟まれたこの古い町並みのあたりが全部走行指導帯になっています。観光客にも大変わかりやすくなっています。

今はこのように、これはしいのき迎賓館といいまして、旧石川県庁、町の真ん中です。その中で見ると、自転車はこのように走ってくださいというふうにプリントされています。長い距離のところは左側通行だよということも書かれています。

これは金沢市からいただいたデータです。二水高校前、市道有松・四十万線にもちゃんとこうやってこっちだよというのがわかるようになっています。

このせせらぎ通りというのは武家屋敷のあたりです。ここは今、高校生が通学のために走っていますが、これは何で高校生かといいますと、ヘルメットを被っていないからです。中学生まではきちっとヘルメットを被っています。自転車走行帯はこっちなのですが、実はこの先にも走行帯があります。これが中央小学校前で、この中央小学校も武家屋敷の近くです。その方向に自転車走行帯があります。でも、センターラインはありません。つまり、双方向に自動車も走るのです。ここは小学校ですが、一方通行にはなっていないということです。だから、自動車は自転車がここを通るよということを自動車運転手も非常に気をつけているところがございます。

これは観光の目玉であります東茶屋街付近です。ここにも皆さんたくさんの観光客がいらっしゃったのですが、これは「とまれ」ということですね。ということは自動車も走ります。これが大通りです。手前が橋場町の方向になります。私はこの小路からの出口のところ、ここに自転車走行帯のマークが見えます。わかりますか。自転車のマークがあります。ここを走ってこないかな、車がここまで出かかってくる危ない場面に見えないかなぐらいの思いで写真を撮っておりましたら、この自動車がこの小路から出てきたのです。

信号はありますが、観光客がここを降りた時に渡ってきます。青になったら渡れると思うのですが、押しボタンか何かで、このマークは歩道上だけにあるのではなくて、この小路から出てくるところにもあるのです。だから、ここに自転車が通るよということが運転している人に見える。右から走ってくるよという矢印も見えます。ということで、いいなと思って見ておりました。ところが、これを見てください。何と左側から右側通行をして

くる方が出てきました。路地から出てきたこの運転手もさぞかしびっくりしたことと思います。事故にならなくて本当に良かったと思います。

2年前にアンケートをしたことを思い出しまして、「自転車は何ですか」という問いかけをしたら、「歩行者」と答えた人が1割ぐらい、100人に対して10人ぐらいいたのです。自転車は車両です。降りて押して歩けば歩行者ですが、乗っている以上は車両になります。そこを今一度考えていただかなければいけない。道路交通法も守らなくてはいけない、大人である私たち会員相互が、マナーだけではなく正しいルールについて知識を身につけなくてはならないと思いました。

金沢市交通安全母の会から県政会議や市長と語る会でご提案してきましたのは、自転車の安全利用推進です。免許の要らない車両ですから、自転車走行者の年齢幅があります。3歳頃から練習するのではないですかね。高齢者まで幅があります。小さい子どもたちの自転車走行には保護者の監督責任があります。この頃カラフルなヘルメットを着用した小学生を多く見かけるようになりました。自分を守ることと自転車についてのマナーとルールを学習する機会が必要です。いろいろな世代に啓発しなくてはならないと思います。

さて、ここで最近の交通トピックスです。新幹線の開業からクルーズ船と、新しい観光ルートが出てきています。石川県ではのと里山海道での悲しい交通事故もありました。交通事故は全体に減少しているのですが、高齢者の死亡事故率は高いまま、自転車の事故も怖いことになっています。そんな中で金沢市は自転車保険の義務化が条例化されました。安全な乗り方を身に付けるとともに、ルールやマナーを学ぶことが大切であることが認められました。いろいろな世代と交流のある私たち交通安全母の会こそが啓発活動を推進する一翼であると思っています。「気い～つけてね！」愛の一声事故防止、歩行者も自転車も自動車も安全に走行できる町でありたい、そして、家族の無事の帰りを待っています。安全で安心な県都金沢、それが私たちの目指すおもてなしです。

最後に1枚、けさ写真を撮ってきました。皆さんはご存じだと思いますが、BSNHKでやっている火野正平さんの「こころ旅」、自転車に乗っていらっしゃいます。ヘルメットを被って安全に走行されているのをこれからも参考にさせていただきたいと思ひまして、写真を紹介しました。ありがとうございました。

「愛知県交通安全母の会」交通安全啓発活動について

愛知県交通安全母の会 会長 日光 直子

私たちの取り組み事例を発表させていただきます。よろしくお願いいたします。

私たち愛知県交通安全母の会は、幼児、児童、生徒並びに高齢者を交通災害から守るため、家庭における交通安全教育と幼児の交通安全しつけ教育の推進者となることに努め、交通事故のない明るい家庭づくりに寄与することを目的として活動を行っております。

母の会の取り組みといたしましては、まず研修会の実施、トラックと交通安全・環境フェアへのブース出展、ハンドアップ広報隊活動、世代間交流による交通安全事業、これが主な取り組みでございます。また、交通少年団集合訓練へ協力するなど各季の交通安全県民運動出発式と啓発キャンペーンへ参加しております。これらの項目について具体的に紹介させていただきます。

まず、今年の2月に歩行・車両運転中のながらスマホの危険性についての研修会を行いました。講師はNTTドコモさんとJAF愛知支部さんをお願いいたしました。愛知県ではポケモンGOをしながらのながらスマホ運転による交通死亡事故が発生しておりますので、みんな真剣に聞いておりました。ながらスマホの危険性を再確認するとともに、ながらスマホは絶対禁止を各地域で啓発していく必要性を感じました。

また、5月には、昨年この会でご紹介いただきました反射糸を使った啓発資材作製についての研修会を行いました。ちょっと見にくいかもしれませんが、こういうものをつくりました。これが「ぴかまる」ですけれども、資料のほうにはネーミングが「もじゃぼん」となっておりますが、みんなで相談した結果、この反射糸がすごく光るので、ぴかっと光る「ぴかまる」と名前を変えました。これ好評なのです。各地域団体でも作製できるように、作り方のマニュアルも作成いたしました。そして、トラックと交通安全・環境フェアへブース出展いたしました。これは毎年トヨタスタジアムを会場に行われる来場者がとても多い大きなイベントになります。具体的な取り組み内容をご紹介します。

この写真は、今ご紹介しましたぴかっと光るぴかまる作製のコーナーの様子でございます。子どもたちに反射糸と毛糸を巻いてもらって、真ん中で縛って持ち手をつくり、両端をはさみで切り、型から外します。形を整えて目玉をつけたら、オリジナルの反射材ぴかまるの完成です。お席にこの作り方の紙を1枚ずつ置かせていただきましたので、またご覧ください。この写真は、反射材のリストバンドの作製コーナーの様子です。ぴかまるの

材料を約 400 個分用意したのですけれども、好評につきなくなってしまいましたので、急遽反射材リストバンド作製コーナーにブースを切り替えました。子どもたちに反射シールを 3 枚ずつ選んで反射材リストバンドに貼ってもらって、油性マジックで絵を描いたり文字を書かせたりして、オリジナルのリストバンドを作製してもらいます。作ったぴかまると反射材リストバンドは、このように反射材の体験ゴーグルを使って反射材の光る様子を実際に見てもらって、その構成について説明して、反射材を身に付けることの重要性を啓発いたしました。世界に 1 つだけ、自分だけのオリジナル反射材を作製して、ライトを当ててピカッと光る様子を実際に見ていただいたことで、より反射材の効果と有効性を実感させることができました。実際に使ってもらうことで交通安全に対する意識の向上につながることを期待しております。

以前行われておりました全国交通安全母の会の活動を継承して、ハンドアップ広報隊活動を行っております。子どもと高齢者の交通事故防止に効果的なハンドアップ運動の浸透を図るため、愛知県交通安全母の会を中心に啓発キャンペーンを展開するものです。本年度も名古屋市中区栄でキャンペーンを行いました。

また、私たち愛知県交通安全母の会は、幼稚園などに出向き、園児、保護者、高齢者に出席していただいて、地域に根差した参加体験型の交通安全イベント「交通安全家族のつどい」を実施しております。この事業は、世代の垣根を超えて自ら参加し、考え、学ぶことで三世代がお互いに思いやる気持ちを高め、交通安全に対する意識や行動を変えていくきっかけを作り、交通安全の輪を広げることを目的として毎年行っております。今年度は 11 月に江南市の江南幼稚園において実施する予定になっております。

実施内容は、午前中に園児、保護者、高齢者が参加してのセレモニーを開催して、園児から高齢者への交通安全のお手紙の贈呈、警察署からの交通安全講話や交通安全マジックショーなどの鑑賞を行いました。また、園児、保護者、高齢者に愛知県交通安全母の会から啓発グッズを贈呈いたしました。午後は子どもたちの交通安全に対する意識を高めることを目的として、各教室で反射材リストバンドを作製したり、交通安全かるたや交通安全ジグソーパズルで遊んだりして、体験型交通安全教室を行いました。また、県警の協力で白バイとパトカーを園庭に設置していただいて、愛知県の交通安全キャラクター、シーベルちゃんと一緒に写真撮影も行いました。当日はお天気にも恵まれ、園児にも楽しい記憶に残る交通安全のイベントになったのではないかと考えております。

次に、愛知県交通安全母の会は、愛知県警察が主催する交通少年団集合訓練にも参加し協力しております。本年度は反射材リストバンド制作コーナーと交通安全子ども免許証

の交付コーナーのお手伝いをいたしました。交通安全子ども免許証の顔入りの写真を受け取った子どもたちは大変嬉しそうで、「ありがとう」という言葉から参加して良かったという気持ちになりました。その他に、愛知県が行う4季の交通安全県民運動の出発式への出席と啓発キャンペーンにも参加しております。

この写真は、出発式で毎回ゲストの方をお呼びして交通安全のメッセージをいただくのですが、この時のゲストは元中日ドラゴンズの山本昌さんでありました。私はもう昔からの大ファンなので、一緒に写真を撮っていただき、握手をしたのですが、考えればグローブのようなゴツゴツしたかたい手だと思っていたら、とてもやわらかくて感動いたしました。特に出発式の後の啓発キャンペーンでは道路通行車両へのサイン板で啓発をして、啓発チラシの配布を行い、県民運動に積極的に参加しております。

私たち愛知県交通安全母の会は、今後もできる範囲で、主に高齢者、子どもを交通事故から守るための啓発活動を行ってまいりたいと考えております。先を見据えますと、財政状況が厳しいこともあり、なかなか大規模なイベントなどを行うのは難しい現況であります。しかし、今年は昨年この講習会で学んだことを生かして、イベントなどで活用できる反射糸を使ったぴかまる作りという新たな一步を踏み出し、手応えをつかむことができました。本日の講習会で学んだことを持ち帰り、新たな取り組みについても考え、工夫をして実施してまいりたいと思います。本日お集まりのボランティアの方々もさまざまなお知恵をいただければ幸いです。

「交通弱者への交通安全教育」

福井市交通安全母の会 副会長 下田 須栄子

福井県交通安全教室の取り組みは市や町によって異なります。交通安全教室と言いますと、みんな高齢者の方に聞くと、ちょっと行きたくないなという感じになるらしいのですが、ある地域では交通安全教室を始める前に必ず童謡などの歌を歌って、体をほぐしてリラックスして交通安全教室を始めます。

安全教室に入る時、まず紙芝居や寸劇から入る地域もございます。そこで「横断マット有効利用による判断能力の差を体験」していただきます。高齢者は車のスピードを安易に考えがちですが、車は予想以上の速さで走ってきます。年齢を考えずに、若い時と同じ速さで渡れるという感覚を起こし、行動することが多いということです。

そこで、横断マットを用いて、高齢者が渡っている時に突然模型の車が横断歩道に近づ

いてきます。その時に、とっさに止まることができるか、また、歩行者や高齢運転者も瞬時の反応動作ができるかなどを自覚してもらいます。横断歩道や歩行者への注意喚起を体験していただきます。

このような体験型横断方法の中から、40、50、60 キロメートルという車のスピードの違いで自分の体力、考え、行動力の違いを認識してもらい、車は100メートル先に見えても安全でないことをみんなで話し合います。事故に遭遇する危険性を把握してもらい、模型車での実験型体験で外出時の歩行者や運転者に対する効果が上がります。参加者は車の速さと自分の歩行の速度が考えているより大きく差があることに気づき、車がとおり過ぎてからゆっくりと渡るようになりました。

2番目の「交通安全標識ビンゴカードで交通道徳を学ぶ」でございますが、既に皆様のテーブルにビンゴカード、それから、ビンゴカード標識の一覧表をプリントしたものを配布させていただいております。どうしても見落としがち、理解しにくい標識が多くあって、わからないなどの声が聞かれ、ことしは県交母で交通安全ビンゴカードを取り入れました。

1枚ごとにその標識の説明をし、理解してもらいます。楽しみながらできる交通安全学習ですが、標識の種類が70種類と大変多く、認識しているのは本当に少ないとの参加者の声でした。もちろん私たちもその部類です。さらには、少人数の集まりでは、高齢者のみならず若い母親にも呼び掛け、協力を得ながら、各市町独特のキャラクターや仮装などをして登場してもらい、和やかな雰囲気のもと標識の説明をすると、熱心に聞いてくれます。今後道路を歩いている今でも以上に興味を持って対応してくれるのではないかと信じております。

3番目の「機能測定三色棒効果実験」でございますが、皆様も既にこういう棒を使って反射神経を確認していらっしゃるかもしれません。まだでしょうか。こんなのは初めてでしょうか。この三色棒は反射神経をチェックするためのものがございます。三色棒のある高さから落としていただきます。その時に、相手の高齢者の方が受け取ります。赤、黄、青によって敏捷さがわかるのですね。とにかく三色棒のある程度の高さから落とした時に瞬時にキャッチできるか、キャッチした部分で自分の機能をはかり知ることができます。

まず、反射神経とは、例えば車や自転車が目の前をふいにとおり過ぎようとする際に、すぐに反応して素早い身のこなしができるかどうかという能力で、瞬時に反応する時、相手の動きをかわす時などに欠かせない能力です。目で捉えたことを瞬時に脳が処理して棒をつかむという情報伝達が行われていることを測定するもので、この結果により各自の反射神経を判断するものがございます。

もし赤を取られた場合、皆さんはどこをつかまえる、私ならこことおっしゃるような方はいらっしゃいますか。なかなか意外と簡単なようで難しいです。赤というのは一番反射神経の衰えを確認する場所なのです。日常生活では転倒や事故を起こす注意が必要な方です。それから、黄色は年齢とともに反射神経が低下していることを知る必要があります。自信過剰は禁物です。注意の上にもう一つ注意が必要なのがこの黄色です。

それから、青は反射神経、集中力は大丈夫と思われる方です。でも、ちょっとした気の緩みで青がすぐ黄色になり赤になります。ということで、常に脳の活性化のための運動は不可欠でございます。以上のような結果が出ますので、常に体を動かし、瞬時に対応できる身体能力に努め、脳は常に働いています。活性化するためのトレーニングは自己管理で、ゆっくり慌てず行ってください。

それから、4番目の「ピカピカキャラバン反射シール貼付活動」でございます。これは福井県では高齢者月間が9月ということで、高齢者の交通事故防止活動として反射材貼付活動を行っております。それは高齢者の交通事故防止活動として福井県と連携する事業です。全県下 17 会場で実施いたしますが、まず知事表敬をし、知事より反射材の贈呈があり、交母の会長の決意表明をし、母の会と県が一体となって、1ヵ月間、靴やかばん、杖などに直接反射材を貼ります。

そうでないと、渡してもたんすの肥やしになることが多いです。渡した場合には利用していらっしゃらない方が多いということで、そのようなやり方をしております。夜間、外出時には赤い服装はもちろんのこと、靴やかばん、杖などにシールを貼ってあることで大切な命を守ることができる旨を伝えます。そして、反射材は必要不可欠であることを一人一人認識してもらいます。

その他といたしまして、母親活動推進事業の一環として、県下を3つのブロックに分け、それぞれのブロックに沿った内容で1年間の成果を発表してもらいます。毎年市町順番制で実施しております。

年に1度、福井県交通安全母親活動推進大会を開催いたしております。この大会は、県交母連合会が主催し、3ブロックによるいろいろな活動を発表いたします。事例発表といたしまして、交通事故、大型紙芝居、寸劇などをしながら、それぞれの地域で趣向を凝らして発表されます。

反射材マスコットづくり、講演などをし、交通安全クイズなどで約5時間の事業を展開しております。参加者は年齢を問わず県下各地より200から250名規模で参加し、「交通安全は家庭から」愛の一声運動を合い言葉に、毎年開催しております。各市町とも地域から

交通安全教室の開催予定が多くあり、活動範囲や回数も年々増えているのが現状です。各市町及び県と一体となって事業を実施していますが、交通安全関係団体の連携のもと持続可能な事業を今後も企画していきたいと思っております。

「交通安全活動啓発物品の作製について」

岐阜県交通安全女性協議会 会長 各務 茂美

岐阜県は21市9郡21市町村あります。その中で、それぞれの地域の方がそれぞれの組織を立ち上げて交通安全活動を行っております。立ち上がり方がそれぞれであるように、PTAであったり、婦人会であったり、私たちみたいな交通女性であったり、立ち上がり方が様々だから、活動も様々です。だから、一概には言えませんが、そんな中、私たち女性がかかわっている県の交通安全女性について今日は活動報告をさせていただきます。

県の交通女性は、昭和55年4月に設立されました。現在23名の代表の会長さんが集まって活動しております。その中の主な事業としまして、女性交通ボランティア等学習会、交通安全啓発物品配布事業、それから、交通安全マスコット製作講習会です。このマスコットについてですが、20年前ぐらいから始めたのではないかと。私らもその前にはありませんでしたので、ちょっとわかりませんが、お手元に配っていただきましたが、それを作っております。

まず、作る流れですが、大体2月ごろに集まっていただいて、今度はどういう方にこのマスコットを配ろうかというのを決めていただいて、それから、6月にはその試作品を作らせていただきまして、会にもそれにたけた方が見えますので、いろいろ作ってくださいます。そこで今回はこれを作ろうということを決めて、9月に作ります。その中には材料の調達とかいろいろありますが、9月には指導員の方をはじめ交通女性の方も集まっていただいて、まず習っていただいて、各自が各地域へ持って帰っていただいて、その地域でまた沢山作っていただきます。

そして、配るのはそれぞれ違いますが、小学校に配ったり、お年寄りに配ったり、スーパーなどで配ったりといろいろですが、まずどんなものを作るかという時に、かわいい、もらって着てみようかなという気持ちになるものを作らなければだめだ、チラシはいつも配っているけれども、多分見てもらえない、捨てられるけれども、手作りのマスコットなら一、二回は着てもらえるのではないかなという気持ちから手づくりのマスコットを作ることにしました。

着けてもらっている姿を見ますと大変嬉しく思うのですが、マスコットはもらった人が交通安全の意識を高めることも大事ですが、私はよく言いますけれども、つくっている皆さんが交通安全の意識を強く持つ、強く願って一針一針つくることが大事なことはないかと思います。だから、皆さんに心を込めて作ってくださいねと言います。作ったものはまた愛着も湧くと思います。着けてくださる子どもさんやお年寄りを見ると、また本当に嬉しくなります。ただ1つ残念なことは、私ですが、高齢者ですので、なかなか針に糸が通らんとか、そういうことでございます。でも、若い人に頑張ってもらっております。

「子どもに対する交通安全活動」

静岡市交通指導員会 青木 昭

活動事例をお話しする前に、静岡県交通指導員連合会の沿革についてお話しさせていただきます。第1としまして、戦後の自動車交通の目覚ましい発展に伴い、交通戦争の時代と言われましたね。それで、子どもにかかわる交通事故が多発しまして、多くの子どもたちが交通事故により尊い命を失いました。学童の交通事故防止の際、自発的に地域の方々が街頭ボランティアの活動をし、交通指導に当たりましたが、現在も行われている交通安全指導の原点であります。

第2に、昭和37年の地方自治法の改正によりまして、交通安全の保持は地方自治体の処理する義務の1つと定められました。交通安全の保持に関する関係条例等に根拠を置く市町村長による委嘱は、現在の交通指導員制度の原型となっております。そして、昭和44年12月1日には、静岡州市町村交通指導員の資質向上と活動内容の統一化を図るため、当交通指導員会が発足いたしました。その後、市町村合併によりまして33市町が現在加盟しております。毎日交通安全活動に励み、従事しております。

これから私たち交通指導員会の業務についてお話しさせていただきます。現在では県で1,500名の指導員全てが交通ルールの意識の高揚を図るとともに、交通安全思想を広く一般に徹底させて交通事故を未然に防止する、その業務を遂行しております。

その1といたしまして、学童、園児等の登校・下校時の街頭指導です。担当学区の通学路におきまして、午前7時から約1時間、立哨指導を毎日実施しております。私たちの朝は、子どもたちと交わす挨拶から始めます。「おはようございます」。おなかの底から出る声、私たちは大きな声で、「おはよう」、「交通事故に遭わないように、元気で学校に行っ

てきてね」、「ありがとう、おじさん」。ちょっと胸にきました。済みません。思い出して。申し訳ない。私たちは、この挨拶で、幸せ、勇気、希望のパワーを子どもたちからもらうことができます。

朝の交通安全指導は交通指導員の主務であり、責務であります。それ以外といたしまして、一般歩行者、自転車乗用中の方への安全通行の指導です。私たちには違反者を取り締まる権限はありません。心優しく、穏やかに、気をつけてと話しかけ、自転車安全運転をお願いし、手を挙げて出る時もあります。歩行者の方にも道路を歩く時の規則を細かくわかりやすくお話をし、特に危険と言われている高齢者の方には極力声掛けをし、命の尊さを話す時もございます。

また、県連合会では、研修会といたしまして実務者研修会を開催しております。また、各市町の役場の担当職員、市の会長と合同でリーダー研修会を開催し、講師には各方面の交通情勢の専門にかかわる先生方をお招きし、講演をしていただき、交通リーダーとしての心構えを身につける研修会をしております。

7月1日、12月1日には、県交通指導員連合会の主催する夏冬の一斉街頭指導を行い、交通指導員に対する、県民一人一人に交通安全の意識の高揚と正しいルール、マナーの指導を行っております。交通指導員に対する認識と理解を求め、交通事故の防止を図るよう目的を持って一斉街頭指導を行っているわけでございます。

最後になりますけれども、交通指導員の募集につきましてお話をさせていただきます。県広報紙とか市民広報紙等を通じてお願いをし、また、自治会、警察OB会に参加、出席いたしまして指導員の活動事例をお話しさせていただいて、交通指導員になっていただくよう呼び掛けておりますが、昨今高齢化が進み、交通指導員になっていただくような人材も、なかなか手がないのが現状です。

そこで、私たち県交通指導員連合会では、会員募集につきまして、メディアを使ったスポットCM制度について現在テレビ局と検討しております。次代を担う子どもたちが安心・安全な笑顔で、交通事故に遭わない、交通事故のない社会になるよう県交通指導員連合会の誇りを持ち、奉仕精神を心に根づかせて、交通指導員としていま一層の貢献をさせていただき努力をいたします。

交通指導員歴47年の私が初心と原点に戻り、静岡県交通指導員連合会が心1つとなって交通安全活動の実践にこれからも努めさせていただきことをお約束させていただきます。静岡県交通指導員連合会の活動事例につきまして発表を終わらせていただきます。

「心に染みわたる教育を 地域の隅々まで」とまとーずの交通安全教育

松阪多気地区交通安全対策会議 石井 ひろみ

石井 それでは、皆さん、こんにちは。私は、一緒にやっていますとまとーずの石井です。

長 長といいます。

石井 よろしくお願ひします。

長 とまとーずというのは、「とまる、待つ、飛び出さない」、みんなでということで、「ず」がついています。そして、これは松阪市と明和町、多気町の1市2町によって成り立っています。

とまとーずは、必ずとまとの約束を6種類作っておりまして、春と秋、幼児の場合ですと、年少、年中、年長と3学年ありますね。必ず1回ずつ別にして、何回も同じのを繰り返しています。ちょうど10年たちました。11月で11年目に入ります。

皆さんの参考になるかと思ひまして、とまとーずの歌をちょっと披露したいと思ひますので、よろしくお願ひします。それでは、いきます。本当は伴奏とかあるのですが、今日はないので、口で言っただけのままアカペラでいきますので、お願ひします。それでは、いきます。せーの。

とまとの「と」は とまる

とまとの「ま」は まつよ

とまとの「と」は 飛び出さない

みんなで守ろう 「とまと」

簡単でしょう(拍手)。これを後期高齢者の方とか幼児のイベントとか、そういう時に使っています。ちょっと難しいので、正式名称が「松阪多気地区交通安全対策会議とまとーず」です。済みません。なかなか覚えられないものですから。

もう1つ、いろいろなイベントとかでも使える「始まるよ 始まるよ」という歌を使っている方もいらっしゃると思ひますが、交通安全バージョンのオリジナルで作りましたので、それもちょっと、「始まるよ」のやつを長くすると時間がありませんので、1、2、3とそのままいきます。

それでは、お願ひします。せーの。

始まるよ 始まるよ

始まるよといったら 始まるよ

1と1で 踏切だ

タッタタッター

2と2で とまれだよ ぴたっ

3と3で 信号機 ぴかっ

4と4で 横断歩道

5と5で手をつなごう キュッ

かわいいでしょう。これ全部「始まるよ」が間に入るのですね。こういうのを使っているいるなところで、ちょっと参考にさせていただけたらなと思います。

それでは、高齢者のほうの参考にさせていただくのにならからじゃんけんを、皆さん、私とじゃんけんして10回とも勝ってください。必ず出す時には出したほうを口と一緒にしてくださいね。いいですか。いきますよ。そうすると、どうやったら勝てますか。後出しですよ。ずるっこいやり方。じゃ、いきますよ。必ずこれと手を一緒にしてくださいね。せーの、じゃんけんグー。遅い。

今度は、時間ないけれども、これ普段は長いことやるのです。じゃ、負けるほう、皆さん、私に勝たせてください。気分よく帰りたいので。じゃ、お願いします。せーの。じゃんけんチョキ。うわ、遅い。こんなのでやっています。これで引きつけて、この時に大事なのは、認知症の予防、脳トレーニングになるということを使うのと、口と動作が一緒になる。

先程も先生のお話にあった、動作と口が一緒になっていない場合とか、忘れてしまうとか、そういうことのために訓練で日頃からこういうことをしたという確認作業をすることが1つと、もう1つ、右ききの生活が長いということ。右ききの生活が長いと、今言いましたように、じゃんけんというのは勝つためにやっていますよね。小さい時から高齢になるまで、小さい時に身についたことは抜けない。だから、負けるほうは難しい。

それと同じように、右ききをずっと私たちはやってきています。小さい頃に定規でたたかれたりすることもありました。そういうのでいくと、皆さん、昔はどちらを歩いてみえましたかという話をします。そうすると、本当に高齢の方だと、左側、歌まで歌ってくれるのです。昔は歌を歌ったそうなのです。「人は左を歩くもの」みたいな、ちょっとフレーズはわかりませんが。そうすると、普通に右を歩いていても何か考えことをしていると左に寄っていくのですね。

ですから、その時に、運転手側はもしかして右を歩いているけれども、近づいてくるかもしれないとか、歩いている人は、おかずを何にしようとか、畑、何がなっているだろう

と思った時にはほとんど違うところに行ってしまうとか、歩行者にも運転手にも使えるように話をするのは。どちらもいらっしゃいますよね。これは、とまと一ずでは本に書いてあるとおり、そのまま説明しないというふうになっているのです。必ず自分たちが言った意味を話して行って、少しでも心に残ってもらって、ああ、気を付けにやいかんと思っただけです。

保護者の方には、例えば道路交通法 14 条 3 に幼児をひとり歩きさせてはならないという条文があるのです。ですから、皆さん、そういう条文があるのですよ、小さい子を一人で外に出したらだめですよ、手をつないでとかと言います。ここで終わっていたら、ああ、そうなんやで終わるのです。

ところが、そこで私、「はじめてのおつかい」というテレビやっていますでしょうと言えば、みんな、うん、うんと言いますね。まさかこんなのをまねする人はいないと思いませんけれども、私はあの番組、大嫌いなのです。早く終わってほしいと思っているんですとか言いますと、結構インパクトがあるもので、子どもは外を歩かせたらあかんのやというのを覚えて帰っていただきたいわけですね。

それで、必ずと言っていいほど何か 1 つ、先ほどゴーストライトの説明もされていたと思いますが、私たちも出てきていただいて帽子をかぶってもらってするのは。ところが、明るいところで帽子をかぶってもらって、いきなりパッと落としますね。そうすると、暗順応の話ができるのです。そこで、真っ暗闇な夜中、歩いてコンビニで買い物をして外へ出るとか、スーパー、夕暮れ時に、危ない時に外出したら真っ暗とかというのに使うのです。すると、何か自分の生活に密着したものがあると、割と印象に残るのです。

ですから、何か 1 つ、本に書いてあるとおりではなくて、地域やら年齢やらその習慣とか、そういうものを前もって会長さんとかに、どうですか、そちらの地域はどういうことに気を付けなければいけないですか、幼稚園はどういうことに困って見えますかとかいろいろ前もって調査をして、それから自分たちで組んで持っていくのが一番わかりやすいのではないかなと思って。

それでは、今から そう、私、1 つ言いたかったのです。Everyone, can you speak Japanese? うちの地域、インターナショナルスクールがあるのです。子どもが Excuse me とか言いながら通っていくのですよ。そこで今、腹話術のげんちゃんという、腹話術はさすがに英語なんか覚えていけませんので、げんちゃん、日本語でしゃべっていいですかと、毎年必ずオーケーとかイエスとか言われるのに、ノーと言われたのです。2 歳児ぐらいの本当に小さい子にノーと言われて、わあ、困ったなと内心想ったのです。

その時に、げんちゃん、どうしよう、私、困ったわと日本語で話していると、先生がその子に一生懸命英語で、日本語でいいのよみたいな、それでやるというような、そういう何かちょっと変わった教室も、日本に来て3ヵ月以内の子に自転車を教えているというのがありますので、フィリピンの子が多かったら英語で、ブラジルの子が多かったらその時は日本語でといろいろ工夫しながらやっています。

それでは、最後に手遊びをしたいと思いますので、よろしくお願いします。片手でチョキ、片手でグー。チョキの上にグーを乗せていただきまして、もう1回やるといけないので変えます。チョキをグー、グーをチョキにして乗せかえます。はい、どうですか。これもよくやってみえることなのです。それでは、これを「でんでんむしむし」。結局、歌う時間ありますか。ちょっとない？ いいですか。じゃ、いきます。せーの。

でんでんむしむし かたつむり

おまえのあたまは どこにある

つのだせ やりだせ

あたまだせ

よく高齢者学級でやりますよね、脳トレーニング。ここで、とまとーずは一言つけ加えます。ちょっと聞いたからって寝る前にせんといてな、寝られないようになるから(笑声)でも、本当に静かに休んでください、あしたに備えてとか。そういう脳トレーニングというのは、朝の出がけとか靴を履く前とか、いろいろな説明は山ほどあるのですが、もう時間がないので、この辺で失礼したいと思います。ありがとうございました。

【2日目】

講演

「“地域の安全は、人々との笑顔から”」

金沢星稜大学 人間科学部 教授 池田 幸應

皆さん、おはようございます。星稜大学の池田でございます。

まず、私、昨日鈴木先生のお話を聞かせていただきました。昨日もそうですが、今日皆さんとの出会い、皆さんの前でお話をさせていただくことに感謝しております。

昨日の鈴木春男先生のお話しの中で、本当に高齢者の方々の交通安全、高齢者だけではなく子どもたちも含めて、まず人の問題、そして、技術が進んでいますけれども、そう

いう技術革新、環境の問題も含めて、健康が非常に重要だということと、体験とか地域の結びつきが結果的に交通安全に結びつく、そういう人の重要性ということをお話いただきました。そういう意味で、私が今日皆さんに話をさせていただく内容に関しては、皆さんと一緒に確認できればと考えております。鈴木先生と違いまして、私はまだ若輩でしっかりした話をできませんので、お手元に資料もございしますが、少しパワーポイントを使いお話しさせていただければと思います。ただいまご紹介いただきましたように、私は、金沢生まれ、金沢育ちですけれども、実はいろいろな形で学生とともに交通安全活動をさせていただき、自分自身も車に乗っていますし、後から出ますが、オートバイも学生時代に乗っております。残念ながらうちのおばさんも、富山県内の横断歩道でひかれて亡くなりました。そういう意味で交通安全というのは本当に身近に感じております。

そして、今日の朝、運転する時も、交差点でいつもヒヤリとしながら、自分も気をつけながら、自分もいつ加害者、あるいは被害者になるかわからないという状況の中で、鈴木先生から、情報がたくさん入った時になかなかその判断が難しいという話をいただきました。これは高齢者の方だけではなく、子どもたちも私たちも同じだと思います。そういう意味では、いかに日頃からの人との結びつきが大事なのだなということを私自身も再認識させていただいたという経験がございます。

それで、今日お話しさせていただく中で、1つでも何かこれはおもしろいなということがあれば、私はありがたいと思っております。テーマ的には「地域の安全は、人々の笑顔から」ということで、まず隣の方の顔を見て笑顔で見詰め合ってもらえますか（笑声）。

私たちも教授会とか会議をやるので、いきなりかたい会議で戦々恐々として意見というよりも野次が飛び交うような会議もまれにあるのです。でも、基本的に最初に笑顔がなければ、そういう気持ちがあれば、人はなかなかいざこざがないはずなのですが、横断歩道で怖い顔をして立っていても車は止まりません。こうやってニコッと車のほうを見詰めたら、必ず誰か止まってくれます。その時に、「ありがとうございます」と、聞こえなくても言うことで自分自身の心も温まりますし、相手の人も、止まって良かったのだなと。その経験が次にまた止まろうという気持ちになると。そういう意味では、たとえもう二度と会わない人かもしれませんが、日常生活の中で、街頭でもそういう笑顔と心の皆さんが日頃からお伝えになっているのだなというふうに私も感じております。

この1枚目の写真は、石川県塚田町とりますが、数年前にトラックにひかれて、死亡事故がありました。その翌日に、私、その時ちょうど学生たちと一緒に金沢東警察署さんと連携し、その地域の方々と一緒に交通安全ということで、かかしを作らせていただきました。

た。学生たちはかかしを作ったことがありません。ということは、地域の方々と一緒にかかしを作ること自身がもう交流ですし、地域の方々から、かかしてこのようにして作るのだとか、そういうことを学ぶ機会にもなる。そういう意味からすると、単なる交通安全だけではなく、二世世代交流とか新しい伝統の継承にもつながってくるということであり、ます。それで、今日は少し、私は大学の教員ということで、学生たち、次世代の人たちに是非皆さんの力とか思いを伝えていただきたいというお願いを最初にさせていただきたいと思います。これは皆さんもご存じで、本日、私、持ってきました。私は今、58歳です。私が小学校1年の時にいただいたハンカチで、大事に持っているつもりなのですが、残念ながら真ん中が少し破れてきました。私はこれをなぜ持っているかということ、母親がずっと持っていたのです。母親は88歳、昭和4年生まれですが、これは私の名前が書いてありますが、当時の金沢市の婦人連合会ですか、金沢市では全部、学校でも全1年生に配布されております。私の同級生で何人持っているかわかりませんが、私、これが好きなのです。普段使うとボロボロになるので、懐かしいなというか、小学校の時の気持ちを忘れないで持っているつもりです。その時に、やはり学校としてもそうですし、保護者としてもそうですし、交通安全に関してしっかりと子どもたちに教えていくこと、伝えることが大切かなと。させるのではなしに、子どもたちが自らどうしたら安全なのかということに気づかせることが大切だと思います。そういう意味で、私ごとで申し訳ありません。今、私は子どもが3人いるのですが、3人とも県外の大学へ、そして就職も県外に行ってしまうと、嫁さんと2人きりになって、会話がなかなか、私はおとなしい(笑声)

その中で、私は今、教育関係にいますけれども、子どもたちに勉強しろとか言ったことは1回もありません。うちの嫁さんも、看護師なので大学に行っていないんですが、うるさく言ったことはありません。したがって、子どもたちは自分で勝手に社会に出て頑張ってくれているのですが、ただ1つ守ったことは、私はできる範囲で、出張等がない時には、まず子どもたちを必ず玄関まで見送りました。パジャマのままかもしれないですが、気を付けてね、行っておいでと。そういう意味で、やはり家庭で、家族で送り出す。つまり、子どもたちは安心して学校へ行く、家から離れるということ。その安心感がやはり重要だなと感じます。そんなことしかできませんでした。ただし、子どもたちは、金沢に帰ってきた時も恐らく安心感で家に帰ってくるのではないかなと思います。そういう意味で、家庭の重要性、そして、皆さんと同じように交通ボランティアの方々、交通指導員の方々が地域で、子どもたちだけではなくに高校生とかいろいろな方々に、子どもから高齢者の方に気を付けてという声を掛けて見守っていただいている。この姿が非常に大切だし、家庭だけ

では、学校とか地域だけではなく、この連合体の中でいろいろな人たちが育っているのだなと思っております。

今日は確認ということで、社会状況、そして、特に子どもたち、次代を担っていくと思いますので、皆さん、例えばお子さんというよりもお孫さんもいるかもしれません。皆さんの中にはおられないかもしれませんが、80歳、90歳になると、私はもう年だからと言う人がいるかもしれません。違います。皆さんの持っている思いとかいろいろな知識とか技術、知恵を残していかないと、私たちも含めて次は育ちません。そういう意味で、是非お願いしたいと。特に子どもたちについて、そして、やはり体験活動、鈴木先生もいろいろな体験型の交通安全教育が重要だということを言われていました。そういう体験、そして、ボランティアについてということでお話をさせていただければと思います。

簡単に自己紹介をさせてもらおうと、私、地元金沢生まれ、金沢育ち、残念ながら小学校4年の時に父親が脳梗塞で倒れました。1級の障害者で25年間ぐらいその中で育ったので、男3人の末っ子でした。そういう意味で、やんちゃで言うことを聞かないということで、私の了承なしに、母親は剣道教室、中警察署へ申し込んで、剣道に行くことになりました。その後、小学校から大学時代まで、金沢大学では水泳、今現在は野外教育学というので、子どもたちとできるだけ地域へ出て活動、そして、日本赤十字社、今も幼児安全法とか救急法、水上安全法の指導員をさせていただいていますし、被災地にはいつも行っております。皆さんはえっ？と思うかもしれませんが、私は暴走族ではありません(笑声)。実はこれは大学2年の時です。当時、学生はローンを組まなかったもので、親に借り、親に返しながらか国を1周しました。野宿で。当時750ccの大きいバイクで、これは九州ですけども、全国を回りました。その時の一番の思い出は、いろいろな地域によって景色も違いますけれども、食べ物が違います。それ以上に、回っているといろいろな人に声を掛けられるのです。どこから来たの？と。当時「石」という番号だったので、石川と言われませんでした。石狩とよく間違えられました(笑声)。遠くから来たねと。いろいろな人たちが、飯食っていけ、泊まっていけと。全く知らない人に声を掛けられて、そういういろいろな人たちの地域の優しさに触れた学生生活だったと思います。今も実は乗っているのです。このオートバイは昭和32年生まれです。私は34年生まれなので、私よりも年たったオートバイに乗っているのです。古い車が好きなので。学生も含めて特に若い人たちができるだけ早い時期に好きなことを見つけて、それをどんどん夢を持って行ってほしいなと思います。大学は、全国にたくさん大学があって、300万人の学生がいますが、星陵大学もちょうど今月で50年を迎えます。2,700名の学生がいますが、皆さん、星陵高校を

ご存じだと思いますが、それと同じ学園になります。学園全体で5,000人ですが、その大学で私は一番古くなってしまいました。今34年目ということで、創設時の先生方は退職されてしまって、その中で、経済学部、人間科学部、人文学部とあるのですが、今、人間科学部というところに所属しております。授業では、奥能登で漁師さんと一緒にマリン実習とかスキーの実習、あるいは救急処置法、あとボランティア活動等をさせていただきました。ゼミという立場になりますので、周りの学生たちとクリーン・ビーチとか、今は石川県の警察本部の少年課と連携して、少年犯罪の活動。これは中に入っているのは全部大学生です。これは一昨年の学生の写真なので、たまたまかもしれませんが、2人とも今現在富山県警に勤務しております。ちゃんと受かってくれまして、今現職の警察官で頑張っています。学生時代はいぬわし君という石川県警のマスコットの中に入っていました。

金沢マラソンというのがございます。鈴木先生のお話を聞いて、私、最後はいなかったのですが、夜から金沢マラソンの会議に出させていただきました。これは奥能登の祭り、環境関係とか、そういうことを学生と一緒に参加させてもらっています。私は野外教育ということで、年間を通して小さな子どもたち、小学生、幼稚園もいるのですが、それと、大学生と一緒に活動もさせていただいています。大学生はこれから親の世代になるので、少しでも大学生に子どもたちと触れてほしい、そういう次世代交流の必要性を深く感じております。また、先程言いました日赤の活動はずっと学生時代から続けさせていただいています。まず、これからの社会の状況という中で、皆さんには失礼かもしれませんが、どうしても小さい頃、生まれて、ずっと少年期、青年期になった時に、皆さんが自分の年齢、失礼ですけれども、お幾つですか。二十歳ですね(笑声)。基本的に年齢で物を言います。平均寿命が何歳だから、自分はこういう状態だと。でも、基本的には精神年齢も含めると、個々の年齢はずっとそのまま、それも皆さんの中に、例えば40代、30代、20代の時の皆さんの心に宿っているままです。

そういう意味では、木の年輪というか、私の好きなバームクーヘンみたいに、ずっと皆さんの人生の中にいろいろな思いとか気持ちが残ったまま。ただし、残念ながら年をとるごとに昔のことを忘れがちの方がいますが、実は心にしっかり残っているのではないかと思います。そういう意味で、これからいろいろな社会状況がありますが、まず皆さん自身が現在だけではなく、未来、将来、どういう人生を送りたいのかということをしかりと感じておられるとは思いますが、やはり見てほしいなと考えています。

よくボランティア、交通ボランティアがありますけれども、ボランティアはもともと外国からの言葉ですが、日本には良い言葉があるのです。「志」。ボランティアは、これはご

存じだと思いますが、もともと古いフランス語、「ウォロー」というラテン語からボランティアの語源は来ています。ただ、ボランティアとは言わなくても日本には「志」という言葉、もともとこれは、心がある方向を目指す。だから、自分はこういうことをしたい、こういう社会を創りたい、こういう人間になりたい、それをいろいろな人たちが持って、その集まった人たちとその心を一緒に歩いていくという意味なのです。日本にはこういう「志」という言葉がある。これは既にボランティアという言葉そのものだろうし、私は日本の誇る言葉ではないかなと感じております。その中で、よく日本の人口ピラミッドということで、人口動態という形で、ちょっと古いですけども、例えばこれは 2005 年の平均の子どもたち、15 歳未満の年少人口、15 歳から 65 歳以上を生産年齢人口、そして、65 歳以上の高齢人口、これが 50 年間でこのようになる。つまり少子高齢化になるということは皆さんもご存じかもしれません。ただし、年齢的にはそうかもしれませんが、たくさん経験がある、いろいろな技術を持った、いろいろな思い、知恵を持った人が今から社会に増えると。

ということは、その人たちだけ、皆さんだけで留めておくと、それはちょっと違うのではないか。皆さんの思いとか知識、技術を必ず下の代、お子さんとかお孫さんにも間接的に伝えることも必要なのではないか。そういう意味では、ここで団塊の世代という方がこの中にもおられるかもしれませんが、団塊の世代の方はある面で非常に人数も多いですし、パワフルな方々だと思います。既にいろいろなことがあります。高齢化社会という言葉はもう死語です。基本的には 65 歳以上の高齢化率に関して、今年度は 27.3%、厚生労働省で 21%以上は超高齢化社会と定義しています。それからすると、日本は、高齢化社会はとっくに終わっています。高齢社会もとっくに終わっています。超高齢化ではなしに超高齢社会になっている。その高齢というのは、悪いわけではありません。さっき言った知恵の塊だということです。それをどう考えるかということだと思います。

人生の中で、先ほど冒頭に、ある人が私は年だからと言うかもしれませんが、女性の平均が 87.14 歳、男性が 80 歳。残念ながら男性のほうが早く死にます。私は嫁さんと 4 つ違いなので、これからすると私のほうが先に亡くなって、嫁さんは 1 人で楽しいことをするかもしれません（笑声）。

これが平均寿命の長さだとすると、私はここにいるのです。皆さんは大体私と同じあたりからこのあたりまでの方が多いのかな。でも、これはあくまでも生命的、時間的な長さであって、心の人生に関すれば、まだこのあたりにいる人もいれば、もうこの辺に行ってしまう人もいるかもしれない。これがあれば大体皆さんの年代がまだまだいろいろ

なことをやりたいという方が多いと思います。そういう中で、一般的に人生を送る中で、いろいろな知識を得て、技術を習得して、いろいろな経験をして、その中からいろいろな知恵を持つ。そういう意味では、今の大学生に毎日授業させていただく中で、知恵までいかないですが、知識は断片的に濃いと思います。経験もなかなか、技術も生かせ、それに関して、やはり皆さんはそういうものを通した形で知恵に結びついている。だから、是非そういうものを今後もいろいろな形で還元していただきたいと思っております。

社会状況というのは、いろいろなネット社会でもそうですし、良いものも悪いものもあります。100均ショップに行ったら買ってしまいう人もいるかもしれませんが、良いものもあります。必要ないものもあります。断捨離ではないですけども、家の中でも必要なもの、必要でないもの、私は自分の部屋から物が最近無くなっています。嫁さんが捨てているみたいです（笑声）。気に入っていた昔からのセーターもなくなっていて、そういうことがありますけれども、本当に良いものと良くないものというのは、その人が判断せざるを得ませんが、本当に大切なものは何かを考えなければならない時代に来ているのではないかと思います。

そのために、鈴木先生の中で、健康な人というのは事故にも遭いにくいということ。肉体的なものだけではなく、健康の定義は皆さんもご存じかもしれませんが、いろいろな言葉で言われています。英語で言えば「ヘルス」、もともと「ヒール」という語源から来ています。あるいはフランス語は「サンテ」。昔、目薬で「サンテドウ」というのがありましたけれども、あれもここから来ています。日本語では、すくすく育てほしいと。この「すく」というのは日本語の古い大和言葉の健康の語源です。真っすぐに木が伸びていく姿です。日本人の感性は素晴らしいのです。そういう中で、本当は真っすぐ育てほしいのですけれども、いろいろな木があったり、日光が入らなかつたり、間引きが必要だったり、里山保全というのが山でもあります。

同じように、今の社会、いろいろな環境でいろいろな情報が入っているので、子どもたちが小さい時は何が大切かということなかなか判断できない。それを周りである程度取捨選択を子どもたちがするようなサポートをする必要があるのではないかと思います。そういう意味で、皆さん、健康のためには適度な食事、栄養、そして、もちろん睡眠あるいは運動というのはご存じだと思います。その中で、睡眠。私は講義の時に寝ている学生は起こしません。なぜかという、脳が眠らせているので。睡眠は疲れて寝るのではなく、医学的には大脳皮質の古い皮質が睡眠とか食欲、性欲とか、全部あります。それを新皮質がカバーしている。その新皮質が旧皮質に眠りなさいよという形で、疲れないようにする

ために眠らせているというのが医学的な定義になります。

したがって、話は変わりますけれども、旧皮質に関しては本能的なもの、新皮質に関してはコントロール的なもの。お酒を飲むと人が変わる人 正しい日本語ではありませんが、お酒を飲むと旧皮質のほうが先に影響を受けますので、その人が出てくるということです。実は子どもたち3人に、結婚するまでに必ず相手に飲ませて、変化を見てから相手を選ぶのが良いと（笑声）。そのためには、もちろん皆さんもこういう環境、心地よい睡眠というのは大事なので、睡眠だけではなくに休養も大事です。少し休んで、じっとしているだけでも体にとっては非常に必要なことだと思います。そういう意味で、体力という定義があります。よく体力に関して、体と思う方がいるかもしれませんが、この指標はよく健康科学とかスポーツ関係でも出されることが多い表です。その中に、もちろん体格とか姿勢、筋力とかも要素としては出ています。体力は環境に対する適応力なので、メンタル面と肉体面の中で自分から積極的に働ける体力、そして、風邪を引かないようにするというのも含めてこういう体力があるのですが、その中で、意外と見過ごしになるのがこれです。体力の定義として、意志、判断、意欲、精神的ストレスに対する抵抗力。これも学問的な体力です。そういう意味では、何かをしよう、皆さんがご家庭で旦那さんに、「今日何を食べたい?」、「何でもいいわ」。体力のない証拠です（笑声）。これを食べたい、それも意志。そのためにはどうすれば良いのか、ではそうしよう。これも学問的な体力の定義だということも是非知っていただければと思います。

私はスポーツ学科にも所属しております。このスポーツを皆さんは体を使って何かをやるという認識を持たれているかもしれませんが、学術的には違います。そういうところは1つも書いてありません。もともとスポーツは「デ・ポルターレ」というラテン語から来ています。自分を解放してありのままの状態に戻すということで、気晴らしをしたり、休養したり、喜んだり、これは全部スポーツの学術的な定義になります。したがって、バスケットボールを持ってフリースローでシュートするのも、ごみを丸めてごみ箱に捨てるのも運動学的に一緒です。私は、学生たちには、ごみ箱に子どもたちがポンと捨てたら行儀が悪いと怒るのではなく、入るまでやると。ひょっとしたらバスケットの一流選手になるかもしれない（笑声）。でも、これは運動学的に一緒です。

したがって、スポーツは体ということではないということを知ってほしいのと、今、スポーツ庁ができて日本のスポーツ人口の中で、する、しないの二極化になっていると。そういうことで、法令的にも条例的にも、するスポーツだけではなくて、支えるスポーツ、見るスポーツという考え方になりました。そういう意味からすると、やっとならスポーツの学

問的なところに近づいてくれたのかなと思っております。

これは皆さんご存じだと思うのですが、よくA型人間、B型人間と言っている、雑誌でもあります。血液型ではありません。私、B型の乙女座ですけれども（笑声）。ここにおられる方は大概A型人間ではないかなと思うのです。私は、典型的に話すのが早い、食べるのも早い、歩き方も早い、じっとしない。人に任せておいて、やはり俺やるわと言ってしまい、そういう特にいろいろなことをしてしまうタイプです。

こういう人たちが悪いと言っているのではなしに、実際に心臓外科医のフリードマンとその弟子のローゼンマンが危ないよということを提唱しています。心臓疾患、冠状動脈、皆さんの心臓は、ちょっと手を動かしてください。隣の人と比べてください。これが心臓の大きさです。外科学的に皆さんの心臓はこの大きさです。だから、私は　ちょっと手を挙げます。これだけ違います。心臓が大きいです。心拍数はちょっと少ないですけれども。この体型ですが、これは水泳をやっていたので。

こんな小さい心臓が、皆さんが寝ていても起きているのですね。ずっと起きているということです。そういう意味では、A型人間の方は、非常にストレスを感じていても走ってしまう。世の中のために、自分の思いが強い人が多いので。そうすると、休めないのです。行ってしまうのですね。そうすると、知らない間に、特に心臓の冠状動脈に負担がかかって、心臓疾患になりやすいというデータがはっきり出ています。突然死も含めてあります。

そういう意味では、気をつけてくださいよということです。決して悪いわけではなしに、体に気をつけてください、無理をしないでくださいということを心臓外科医の方々が提唱しています。文化人類学的にはキーパーソンだと。新しい道を作ってくれる、防波堤とか、どんどんプロジェクトを立ち上げる、本当に必要なキーパーソンだと指摘されています。このチェックリストは参考までに、いろいろなチェックリストがあるのですけれども、負けず嫌いとか仕事熱心とか、そこはちょっと小さな資料ですけれども、皆さんご自身でやってみて、10以上あるのはA型という指標が一般的には言われております。

皆さん、「ストレス」という言葉はご存じだと思うのですが、「ストレスを感じて」と言われる方はいますか。日本語ではそういう表現で言いますか。ストレスは、反応自身をストレスと言います。「ストレッサー」というものは、暑いとか寒いとか、今ちょうど前で扇子、これもいい判断です。

先ほどご説明申し上げたように、肉体面だけではなしに精神面が非常に重要だと。特にストレスの状況は3つの段階に分けられます。第1期、第2期、第3期と。問題は第3期です。暑ければちょっと汗をかく、これは第1期です。あるいは、少し最近筋肉が低下し

だから、ちょっとウォーキングしようかというのは第2期になります。自分で積極的にそういうストレスで筋肉に負担をかけて筋繊維を拡大化させる。

問題は第3期、これはもう病気です。一過性の強いストレスが来た時、あるいは継続的にストレスが来た時に、当然心だけでは済まないで、精神面から肉体面もボロボロになって、もう病気です。

外国の方はちょっと調子が悪くなったら心臓内科に通ったり相談したりするのですが、日本人はそういう精神的な面は、例えば「精神病」という言葉があります。最近は余り使いませんが、昔はよく言われました。精神科に通っていると、えっ？ と言う人がいますけれども、調子が悪くなったら専門医にかかっているいろいろな話を聞いていただいたり、カウンセリングを受けたり、あるいは薬を飲んで、治ればそれで良いのです。風邪と一緒にです。でも、日本人はなかなかそういう差別を持っていますので、非常にそういう精神異常というのは、受ける側が非常に遅れている国だと私は感じます。そういう意味では、この3期までにならないようにしていただきたいと思います。これは真面目な方、熱心な方に多いです。気をつけていただきたいなと思います。

私、今日1つお願いというのは、子どもたちです。子どもたちはみんな夢があるのです。大学生の教職の授業で、君ら何になりたいの？と言ったら、公務員と。安全を守りたいから警察官になる、人の命を救うから医者になりたいなら分かるけれどもという会話を交わします。その時に、学生たちが教職を目指したいと。何で教職を目指しているのだという時に、うーんと。君ら自身は、ほんの小さい頃、どうだった？ 小さい頃は夢があったと。では、子どもたちに1回会わせようということで、幼稚園の年長さんと大学生を会わせて、大学生が自分たちで考えて、みんな将来何になりたい？と。こういう絵を描いたりして、たまたまですけれども、野球選手とか花屋さん、サッカー選手、警察官、歌手とかいろいろな、子どもたちは目がきらきら光っていますね。そういうきらきら光っている目を持った子どもたちが、中学校、高校、大学になって、だんだん何か、えっ？ という顔つきになる子どもたち、それがまた皆さんの目を見ると、子どもたちには失礼かもしれませんが、本当にそのまま思いが出るような目をお持ちです。非常に素晴らしいことだと思うのですが、そういう子どもたちの気持ちを伸ばしてあげなければ駄目だなと。子どもたちはいわゆる社会の宝物ではないかと思います。

文科省のデータでは、大分前から子どもたちの課題ということで、生活習慣が身に付いていない、あるいは体力的なもの、コミュニケーション能力とか体験活動がなくなってきた。子どもたちのせいではありません。実は子どもたちが朝起きてきて、「おはようござ

います」と。皆さん、おじいちゃん、おばあちゃんがいるかもしれません。では、その親は「おはようございます」と言っていますか。戸を開けたらしっかり閉めるとか、玄関先でスリッパを並べるとか、子どもたちはやっても、そのお父さん、お母さん、つまり、今の20代、30代、40代の人はやっているか。子どもたちは全部見えています。

昔は体験活動を簡単にできましたが、今は生き物がいなくなり川も入れません。金沢市内の川に入っていると、すぐ警察が来ます。昔は毎日川に入っていました。つまり、残念ながらそういう環境になっている。そういう意味では、子どもたちを取り巻く環境がそういう自然にかかわる機会が減っている。子どもたちの少子化あるいは地域の青年団、少年団もなかなか、最近また増えていますけれども、そういう環境も少ない。何かあればボタン1つでネット検索、自分で図書館に行ったり見たりしない。おれはもう面倒くさいからしないと。

そして、地域、家庭の教育、自分の子どもにすら注意をしない親がいる。ましてほかの子どもたちに注意することはなかなかない。訴訟が起きるから。私、昔、アパートに住んでいた時に、アパートに泥を投げた子どもたちがいたので、注意しました。注意して、追いかけて捕まえました。大変なことです。芋づる式で10人捕まりました。優しい言葉で諭していないと言われました。

予想はしていたのですが、夜、親が来ました。まずいなと思ったのです。うちの子に何をしてくれるのだと。そうしたら、違うのですね。お父さんとお母さんと本人が来て、お父さんがまず「ありがとうございます」と。うちの子どもは私たち両親にすら注意を受けたことがない、他人から注意を受けて泣いて帰ってきて、こんな話だと。すごくありがたい、ラッキーな機会だと、そういう言葉を言っていて、やはり今、なかなか他人に注意することもそうですけれども、他人から注意されることがありません。

大学の授業でも、皆さんが大学生だとします。例えばしゃべっていたり寝ていたりすると注意します。そうすると、大学生は何と言うか。なぜ僕だけに注意するのだ、他にも寝ているのではないかと。つまり、自分が注意されたことの内容よりも周りにすぐ転換しますし、全く心が開いていない。その時に、もっときつく言って、出ていけと言うものなら、あいつはけんかを売っているとなります。

その時には、終わった後にさっきみんなの前で注意して申しわけないね、でも、やはりこういう形でと言ったら、先生、済みませんと、心を開いてくると思います。その辺の日常の会話とか言葉、表情とか、本当に何かを伝えたいという気持ちがあれば恐らく通じるのだらうなと思っています。

これはちょっとややこしいデータですが、数年前に金沢市内の保育園児の調査をしました。2歳から6歳の子どもたちです。簡単に言えば、ちょっと難しそうに見えますけれども、1日に外で遊んでいる、インドアとアウトドアですね。ほとんど子どもたちは休みの日に中で遊んでいるのは9割、それも、0.5というのは30分です。0.5から1は30分から1時間、つまり、1時間以内が4分の3。今の子どもたちは外で遊んでいないのです。これはちょうど秋の10月頃のデータです。金沢市内の13保育園でとりました。その原因をヒアリングしました。予想どおりの結果になりました。お母さん方が、子どもたちが公園で遊ぶと服が汚れる、洗濯しなくてはいいかん、あるいは幼稚園の近くの公園とかには私の嫌いな親がいる、あるいは日焼けする。全部親の都合です。

金沢にもいろいろな郊外型の大きな店がありますが、そういうところのゲームセンターを1回よく見てください。時々ゲームセンターでお父さんかお母さんが財布から小銭、100円玉を子どもたちに渡して、そして、お父さんとお母さんはちょっと買い物に行ってくるから、ここにいなさいよと言って、子どもを置いていく親がいます。これはどうかと思います。私はゲームセンターを否定しているのではないのです。子どもと一緒にやればいいのです。子どもと一緒にゲームをやってならまだいいです。そういう姿が見られて残念だなと思います。

あるいは、子どもたちがクリスマスシーズンにはおもちゃを買ってと言います。言うことを聞かずに、子どもがみんなの前で、地面でワーツと泣きわめいて、駄々をこねてやります。私、それ頑張れ、頑張れと思うのです（笑声）。本当に自分の感情を出して、嫌なことは嫌だと。わがままかもしれません。でも、わがままだけでいいけれども、我がままだったらいいでしょう。基本的には、本当に子どもたちには感情を出すように育ててほしいのです。今の大学生は本当にのっぺらぼうが多いのです。みんな何かを持っているはずなのです。だから、そういうことが人間教育のスタートだと思いますし、そこに一番心を開くのは笑顔ではないかなと思います。子どもたちの遊びはどんどん変わっていますので、これからはロボットも非常に良い面ではあるのですが、こういうロボットも含めてITのそういうものが友達、人間の友達がなくなるのではないかというちょっと大げさな書き方はしていますが、そのように変化していると。

学校教育。文科省は既に平成8年の報告の時に「生きる力」を提言して、豊かな心、確かな学力、そして、健康・体力と人間性を重要視して明記しております。かつ、これは大学生です。文部科学省は、大学を卒業する時に、学士 私の場合は、学部では教育学士、大学院では修士、博士となりますが、その時に、文科省が大学を卒業する時に、これだけ

持っていないよという指針を示しています。知識・理解から始まって、総合的な学習経験と創造的志向、チームワークとか生涯学習力。文科省は学生に求めている、では、大学の教壇に立っている先生方は持っているかどうかということです。私も含めて。これだけ持っている先生方も少ないかもしれません。ただ、これだけ文科省は明記をして努力をしているということだと思います。

今、ベネッセという会社があります。少し前のデータですが、1つのデータとして親との会話も含めてコミュニケーションを取っている子どもたちは、非常に自分の考えをわかりやすく説明したり、自分の感情をコントロールしたり、自分が率先して行動したり、あるいはそういう会話だけではなく、家事手伝いをした子どもたちはそのような傾向があるということを指摘しております。そういう意味で、子どもたちの交流がいかに大事かということだと思います。

日本の昔の言葉に、「三つ子の魂百までも」、「三つ叱って五つ褒め、七つ教えて子は育つ」。素晴らしいなと思います。先人の方々は、七五三という考え方もありますが、叱るが一番少ないのです。五つ褒め、七つ教える。ここが凄いです。いかに褒めること、教えることが重要かと。これには年齢は関係ありません。皆さんが今日ご自宅に帰られて、旦那様がおられたら、旦那様を褒めてください。育ちます（笑声）。これは人間の年齢問わず心を開かせる大事なことなのです。昔の日本人は、経験からちゃんとこういう素晴らしい言葉を持っている。教育の原点は、自由、権利は当然あると思いますが、そこにはやはりルール、責任、義務があるのだよと。そういう意味で、日本は世界的に交通安全に関しても、車なら車、車両の運転者の義務に関してはかなり厳しいです。では、歩行者はどうだろう。要するに、歩行者指導ですね。そういう意味では、日本の中で、これからはもちろんその中で、運転者は運転しなければ普通の人なのです。私も歩いたり、自転車に乗ったり、オートバイに乗ったり、車を運転しています。それぞれの立場でやはり世の中で暮らしているということからすれば、それぞれのお立場の責任と義務をしっかりと伝える必要があるのかなと思います。これは10月9日、体育の日の北國新聞さんになります。要するに、幼児、小さい頃に外遊びしている子どもたちは非常に体力があるというデータが出ています。つまり、いろいろな体験のある子どもたちは、いろいろなことにチャレンジする波及効果があるということです。いろいろなことをさせたりすることだと思います。そういう意味で、日本とイギリスは歴史のある国、同じ島国ですがけれども、日本は小学校に行っている時に、1足す2は当然3ですね。ルールです。算数です。3足す3は7と言われたらバツです。日本は残念ながら丸かバツなのです。四捨五入にならない。算

数のルールとしては素晴らしいルールです。ただし、イギリスは、例えば四角の中に何か書いてください、何かと何かを足したら5ですよ。子どもたちは、はい、1と4。正解です。2と3。正解です。つまり、いろいろな答えがあるということをイギリスでは学んでいく。だから、自分はケーキが好きだからケーキ屋さんになったり、レストランに勤めたりという。そういう意味で、日本はまだまだ偏差値が高いから国立大学へ行きます。命を救うためにではなしに、家が開業しているから医学部に行きたいという方も、ごくわずかですけれども、残念ながらまだいるかもしれません。そういう意味では、自分の目標をいろいろな世界があるのだという、自分の価値観を認めようという気持ちが大事なのかなと。そして、答えを自分で探していくことが大事なのかなと思います。

体験活動の中で、野外教育の専門なので、石川県は立山と白山があります。日本の三名山、富士山と立山と白山、北陸に2つもあります。連峰なので、実は立山という山はないのですが、山があって川が流れて、扇状地、平野があって、日本海側の非常に自然が豊富なところですよ。その自然の豊富な中で、子どもたちはいろいろな体験活動ができる。地引き網とか川で魚のさばき方、白山に登るなど、そういうさまざまなものを石川、富山は持っている。ただし、残念ながら、冒頭言いましたように、子どもたちの責任ではありません。皆さん、この歌、「手のひらを太陽に」、ご存じでしょう。「僕らはみんな生きている」。当時は1964年、昭和39年ですか。この時にはミミズもオケラもアメンボもトンボもカエルもミツバチもどこでもいたのです。今はいないです。今、スズメすら減っているのです。カラスはいます。タヌキもハクビシンも多いですが、残念ながら自然界からいろいろな植物、生き物がたくさん減ってしまっている。「手のひらに太陽を透かしてみれば」、今こういうことをやったら新興宗教に間違えられます（笑声）。でも、血潮という言葉はそういうものです。皆さん、さっき心臓の大きさを言いましたけれども、心臓は動いているということを見ることが出来ます。ちょっとここは暗いですが、自分の片方の手をだらっとして、片方の手の裏を見てください。ちょっとやって、またすぐに見てください。瞬間的に自分の手のひらをぱっと見てください。色が違います。当たり前です。下の色は赤いでしょう。心臓があって、心臓から上と下は重力の関係で。でも、心臓がしっかりポンプとして働いているお陰だと。そういう意味では、いろいろな昔の歌は、こういう手のひら、あるいはミミズとかミツバチとか、そういうものをしっかりと見ているのだなと。NHKとしては「みんなのうた」という形で子どもたちに広めているということですね。幼稚園みたいな形、保育園とか、つまり、何も無い砂しかない砂場でも、子どもたちはそこを掘ったり何かを持ってきたりできる。私たちの時は、そこに行ったら犬とかネコ

の家があったら、ガラスの破片があったり缶があったり、手を切ったことがあります。

今は公園の砂場は全部管理されています。消毒もされています。だけれども、先程言ったように、子どもたちは遊びたくてしょうがないけれども、お母さんが、汚れるというので遊ばせないケースが残念ながらある。何もなくても砂さえあれば、子どもたちはいろいろなものに想像力を働かせる。これも1つの経験です。だから、教育の原点は教えるのではなく、本人が気づいて、何かそれを伸ばすような環境設定をすることかなと思います。)

そういう意味で、今年の夏、お父さんには了承を得ていますが、実はこの人は学校の先生です。私と知り合いですけれども、家族で白山のふもとのところ、川に来てイワナを採りました。子どもたちと奥さんと一緒に、おいしいねと言って自分たちでさばいたイワナを食べています。これは小学校6年生の子がイワナを採りながら、大学生でサポートスタッフがやはり手が届かないからと、子どもたちと一緒にイワナをとっている写真です。小学校6年生も大学生も同じです。体験は年齢に関係ないです。初めてやるかやらないかです。時には小学校の子どもたちのほうが先生のケースもたくさんあります。ただ、年をとった時に、そういう感受性、気持ちを持っているかどうかだと思います。

そういう意味で、1970年代、アメリカの海洋生物学者のレイチェル・カーソンという女性の方、もう亡くなりましたが、当時の世界の公害とかに反対した方ですけれども、本の中の一説として、「知ることは感じることの半分も大切ではない」。つまり、感じるのが重要なのだとしっかりとっています。感じるということは、頭だけで感じるのではなく、全部で感じるのです。人間には五感がありますから。第六感、第七感もあります。そういうことを子どもたちは持っているはず。そういう教育も必要なのかなと。

これは平成10年の文科省関係の資料で、いろいろなお手伝いとか体験活動をした子どもたちは道徳観が高いという、一般的なよく使われる資料になります。体験活動の効果もこういう形でいろいろな形で指摘はされております。

これは先程のベネッセと同じデータに近いですが、会話が深いほどいろいろな好奇心が育まれる。つまり、会話がいかにか大事か。親だけではないです。いろいろな人たち、皆さんが街頭で小学校の子どもたちに、「横断歩道、気をつけてね」、「おはよう」、「今日どうした?」、それが大事なのです。そういういろいろな人たちと会話を。顔と顔、しっかりフェイス・ツー・フェイスの関係を築くことが子どもたちのいろいろな成長につながるという事実があるということだと思います。

それが子どもだけではなく、子どもたちが大きくなった時、親とのコミュニケーションは、大人になってからの行動、子ども時代に親とのコミュニケーションによって、先程

言った自分でコントロールする。そういうデータも出ているということです。

少しボランティアの話をしたと思います。これはたまたま私の息子、長男になります。これは馬術競技です。国体優勝の人たちが来た時の写真ですが、同じ馬でもホースライディングというのがあります。私、このNPOのスタッフとして11年目、理事長をさせていただいているのですが、年間を通じて障害のある子どもたちと一緒に馬に触れていただいて、心身のリハビリということでやらせていただいています。

その中で、「サイドウォーカー」という言葉があります。難しい言葉ではありません。サイドというのは英語では横という意味でサイド、ウォーカーというのは、歩くことをウォークと言います。ウォーカーはERをつけて歩く人ということです。つまり、横にいて歩く人です。どういうことかということ、寄り添いということ。

初心者あるいは障害者の人は自分で馬に乗れませんので、乗り手に対して横でサイドウォーカーが両サイドについて、馬を引っ張るリーダー、専門的な人、全体を掌握するインストラクター、あと記録の人がいますが、その中で、サイドウォーカーは無理やりさせるのではなく、本人が自分で乗ればさわる必要はないのです。あるいは自分の座位をとれないからといって、例えばグッとつかむと嫌ですから。でも、それをそっと支えてあげれば安心感があります。

皆さんも、特に女性の方は夜道の暗いところを歩くのは不安だと思います。そこに信頼できる人が一緒にいたら、何か安心感がありますよね。本当にそうです。一緒にいるだけで安心する。時に応じて、その乗り手に応じてサポートするのがサイドウォーカー、これがボランティアかなと。

今日皆さんは交通ボランティアの方々なので、ボランティアに関してもスポーツ同様に、ラテン語から来ております。語源は「ウォロー」というラテン語です。英語では「ウィル」に当たります。ウォローは英語ではウィルです。ウィルというのは日本語でいけば志です。つまり、自分の心が向く方向というのがボランティアの語源です。

そういう意味では、自分が何か人のためになって自分にも返ってくるというのは違います。自分の心がどういう方向に向かうのか、それによって結果的に地域の人とか社会、いろいろな人たちがお互いに喜び合って心が温かくなるというのが学術的なボランティアの語源になります。そういう意味では、こういう相手を思う思いではないかなと。

ある人の本の中で、「人はなぜボランティアをするか。それは人間だから」という一節があります。私も大学でボランティア関係のクラブを半年間担当しているのですが、この言葉を一番言ったな。人間は本来そういう気持ちを持っているのだらうな、人として気持

ちがある、その自分の気持ちを他の人の気持ちと一緒に育て、一緒に歩いていくということかなと思います。そうなるには、いろいろな見方が必要だと思います。横断歩道で立っている時も、子どもたちが小さければ、ちょっとしゃがんでも目線が全然違います。ここに電信柱が立っていれば、ちょっとこっちへ行けばここが見えます。そういう意味で、いろいろな視座、視野、視線を持つことで相手の立場になれるのかなと。車を運転されている方は車のドライバーの気持ちも本当はわかるはずですが、そういう意味で、お互いの視点を変えること、視座を変えること、視野を変えることも必要だと思います。

これは一般のボランティアの特徴ということで、自発性、無償性、社会性等といろいろありますが、基本的には自分が何をしたいのかということだと思います。そういう意味で、学生たち、一部ですが、ちょっと古い資料もありますが、近くの防災訓練、全部大学生、私の周りのゼミ生ですが、こういうことをやったり、あるいは金沢東警察署の交通安全、東警察署のマスコットはポンタというのですが、中身は全部学生が入っていたり、交通安全で高齢者の方々と皆さんと一緒にやったり、これはその時に学生が作って、全員に送らせていただきました。私は絡んでいません。学生たちが自分で、「今日も交通安全に気をつけて、手を挙げてね」というのを送りました、学生はお金がありません。100均です。でも、十分だった。学生が、先生、100均で買ってきましたと言って、自発的に研修会のお手伝いをさせていただきました。

東日本大震災、災害現場に行くことで、やはりその空気に触れると。皆さんもこの中で災害現場に行った方が多分あるかもしれませんが、行ったら逆にありがとうと言われるのです。よく来てくれたと言われるし、飲み物を出してくれるし、逆なのですね。本当は何かしてあげたいと言うけれども、逆にいろいろなことをされて、感謝されて帰ってくる。そういう意味では、やはり今後、残念ながらいろいろな被災の可能性があるので、少しでも大学生を含めて若い人たちにこういうことを知ってほしいなということで、私もさせてもらっています。

あと、少し前の新聞ですが、奉仕活動を入試で評価とか、これに関して、私はマイナスの感情を持っています。きっかけとなるのは良いですけども、そこに走ってしまう若者が出るのではないかなと。そうすると、やはり人のためにもならないし、自分のためにというボランティアの語源、あるいは志というところをしっかりと教えた上でこれを導入するのなら良いですけども、それを教えずに導入するとちょっと違うのではないかと思っています。ただし、大学だけではありません。企業における企業ボランティアは、ほとんどの企業でやっています。なぜ企業の経営者はそれをやるのか。社員が育つから。それによ

って社員教育につながる、社員が人間として自分の意思を持ってしっかりと働くようになる。それが結果的に会社としていろいろな形で利益も伸びる。そして、会社として社会に貢献すると世間も思っているということで、今はほとんどの会社、企業でもこういう形でその取り組みを入れ始めています。

そういう意味で、ぜひ皆さんにお願いです。特にボランティアの5カ条、一般的に良く言われていますが、先程から言いました相手の目線とか多様性、明るさ、これは5番目です。さっきのA型人間ではないのですが、心臓疾患もあります。自分のできることをできる範囲で。無理しないでください。これだけお願いしたいと思います。

これから次世代を育てる重要性ということで、まず小さな子どもたちが持っている生きる力を引き出してやる。次世代の親になっていく高校生、大学生も含めて、若い人たちにその力をしっかりつけさせる。

一番大事なのは皆さんです。これまで社会を支えていただいた皆さんに、皆さんの生きる力を伸ばす。皆さん、まだ力は伸びるのです。まだまだ皆さんは夢を持って、将来何をしたいのだ、その力を伸ばしていただいて、その知恵をぜひ地域に、若い人たちに生かしてほしいなと思います。そういう意味では、厚生労働省の「健康な心を持つ人」という定義があるので、皆さん無理をしないということ。

それと、これは皆さんの親になるかもしれません。私の88歳の母は、少し痴呆はありますがけれども、自分のことは自分でします。皆さんの特に親の世代、また、おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃんの形で皆さんが無理をされないようにしていただきたいなと思います。これからの人づくりということで、自分に対する、他人に対する信頼、個性、あるいは積極的に地域のことを活動していく、そして、学校、家庭、地域、これはもちろんそうだと思うし、笑顔ではないかなと。

最後に、皆さんご存じのように、NK細胞ですね。これは実際に医学的に実証されています。いろいろな形でナチュラルキラー細胞が、これは笑顔がいかに大事かということ。私も学生に注意することがあります。いきなり注意しません。褒めます。褒めてから、だけど、こうしたらもっと良いよということを中心にしています。誰かにいきなりバツと言われたら、人間はかちんときますけれども。だから、心を開いたら伝える。

その一番良い手段は笑顔だと。笑顔はどんな言葉よりも素晴らしいと思いますので、笑顔プラス言葉。是非今日から、また旦那さんとか周りの人に優しい言葉を掛けてほしいなと。子どもたちにも人です。人間が一番喜ぶのは、人によって喜ぶのです。人を笑顔にすることで喜ぶし、一番悲しむのも人によってなのです。

自分の生活でいろいろなことがあるかと思いますが、今まで以上に自家発電していただいて、もう年だからとか考えずに、したいことはやってください。したいことをしながら自分も自家発電させて、その中で、プラスのところで少しでも多くの人たちにこれまでどおり笑顔と声掛けをしながら、交通安全の普及・啓発に邁進していただきたいと思います。

したがって、車とか車両のドライバーもそうですが、一番大事なのは、小さい子どもたちに交通安全の教育をすることが、その子どもたちが育っている中で、そういう心を育んでいけば、そういう交通安全の心を持ったドライバーとか歩行者になるのではないかと思います。

そういう意味で、是非皆さんが普及活動の中で、鈴木先生が言われたように、体験型の教育、一緒にいろいろなチームの人たち、いろいろな年齢の人とかいろいろな人たちに声を掛けて、それを、その中にはいろいろな発想があります。連携・協働的な、その中で一步一步、楽しみながら交通安全の活動をしていただきたいなど。そのためには、皆さんが元気であること。心はいつも二十歳です。肉体面に関しては、それはどうしても人間は老化していきます。それは気をつけて、無理をされないようにということだけ添えて、今日のお話を終わりたいと思います。

とにかく皆さんの笑顔と元気に感謝させていただいて、皆さんの記憶になくても、皆さんが立っている街頭の横を通る歩行者、自転車、バイク、車のドライバーの中にも、良い笑顔だな、気をつけようと思ってくれる人が山ほどいます。それが皆さんの一番のボランティアですし、皆さんのその笑顔が別の人々の笑顔を作って、その人がまた一人一人伝わっているのではないかと思います。今日はありがとうございました。

グループ討議の結果

1班

グループ名	高齢者
討議テーマ	高齢者に対する交通安全活動における課題と対応
活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ・交通安全教室の開催 ・高齢者宅訪問（反射材を配布し、直接、靴に貼る） ・敬老会などで反射材・チラシを配布 ・三世代交流での交通安全教室開催。園児と高齢者が一緒に横断の仕方を学ぶ ・自動車学校などでのドライバー講習会 ・地区の老人会の運動会に参加し、啓発活動を実施
課題の抽出	<ul style="list-style-type: none"> ・反射材を実際に使ってもらえるようにする（配っただけではそのままにしてしまう人が多い） ・免許返納に関しては、メリット・デメリットなど難しい問題が多い ・家族や行政などの協力・サポートが必要 ・三世代交流では、親世代の参加が少ない ・教室に参加しない人への対応の仕方
対応策	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問などした時は、直接、靴に貼る ・反射材の効果を実際に見てもらう

2班

グループ名	高齢者
討議テーマ	高齢者に対する交通安全活動における課題と対応
活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどの県が交通安全教室を開催（真面目一辺倒の会合） ・高齢者の特性をつかみ、楽しく考え合う、そして土産（会議の内容）をもって帰れる工夫をしている。教室では、笑わせながら内容を進めている。（三重県）
課題の抽出	<ul style="list-style-type: none"> ・交通安全意識の向上を図るには、教室で『危険ですよ！』で終わるのではなく、どう危険なのか、予知トレーニング形式で考えさせるような、しかも楽しく笑いながら理解してもらおうように内容を考える。
対応策	<ul style="list-style-type: none"> ・教室に参加して欲しい方が参加しないので、敬老会・運動会を利用して行うしかないのではないかと。 ・生活の足が必要なので、そうしたことを考えていかななくてはならない ・アンケートを取ることによって、自分の運転等を振り返ってもらう

3班

グループ名	子ども
討議テーマ	子どもに対する交通安全活動における課題と対応
活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ・マスコットを年度末に仕上げ白山神社でお祓いを受ける。4月の入学式で贈呈（ほとんどの市・町で実施）。材料費は、各々の会で負担 ・毎朝、自宅前で通学生（小学）に声かけをしている ・子どもの名前を入れた祈願ダルマを学校に贈る（小さい学校なので可能） ・幼児期からの家庭教育が大事である。母親に対し交通課長より講話 ・幼、保育園での人形劇を継続。子どもは楽しむ。親はスマホに熱中で残念。 ・毎朝、指導員が「人間信号機」の役割をしている ・安全協会婦人部がマスコット作製 ・紙芝居、カルタ、ゲーム、横断マット等による啓発 ・補助金を基に、保育所を訪問。三世代でヒヤリマップ貼付
課題の抽出	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭での意識向上が第一（親の姿が子どもの姿） ・反射材の必要性を子ども・保護者が共有すること ・広報活動については全世代を対象にする
対応策	<ul style="list-style-type: none"> ・直接親に注意する ・親と一緒に活動する ・親・祖父母の掛け声が一番（「気を付けて」など） ・大学生を活動に巻き込む

4班

グループ名	自転車マナー
討議テーマ	自転車マナーにおける課題と対応
活動状況	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車競技大会出場への指導 ・登校時のマナー指導 ・自転車シミュレーションを使つてのイベント体験 ・自転車保険加入の進め ・小3対象に交通公園で自転車マナー教室 ・三世代交流会での体験指導
課題の抽出	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中学生での指導は行っているが、高校生への指導が足りない ・高齢者に達しない、一般の人への指導をどうするか
対応策	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児期からルールを教え続ける ・親にもルール・罰金などについて知ってもらう ・小・中学校の保護者会での指導 ・ヘルメット着用、SGマークの確認、自転車保険の進め

講評 千葉大学 名誉教授 鈴木 春男

昨日からコーディネーターとして出席させていただいて、少し感じたことをご報告したいと思っております。

昨日は、私が話させていただいた後、皆さんそれぞれ7つの県から大変素晴らしい事例報告をお伺いして、大変参考にさせていただいたのではないかなと思います。今日は池田先生にご講演をいただいた後、皆さんにグループ討議をしていただきました。大変ご熱心にご討議いただいて、得るものがたくさんあったと私自身も感じております。

その中でも第1グループ、第2グループで高齢者のことを取り上げていただきました。多くのグループ、第1グループ、それから、第3グループからも反射材のことを取り上げていただいておりました。反射材は大変有効なもので、特に昨日のご報告の中で、いかに反射材を着けてもらうか、そのことが大事で、なかなか配ってもしまわれてしまうという今日のご報告にもありましたが、やはり着けたいくなるような反射材をどう工夫するか。

愛知県の場合には、ご存じのように、反射材に毛糸を使って、ぴかまるですか、これを作っておられる、これは大変素晴らしい。私はでき上がったものをお配りして、それがかわいいから着けるといふことあると思うのですけれども、本当に大事なのは作るプロセスだと思ふのです。リーダーの方がお子さんたちを呼んで、お子さんたちが一緒に手伝って作ってもらう。自分が作ると、やはりそれを着けたいなという気持ちになります。

とりわけお子さんが作ったものをお年寄りにプレゼントするなんということになりますと、お年寄りやはり大変喜んで、特にお孫さんが毛糸で手袋を編んで、あるいはマフラーを編んで、作ったから着けてねと言うと、これはもう着けることは間違いありませんから、配ることも大事ですけれども、配ったものをどうやって着けてもらうか、これが非常に重要なポイントになるのではないかなということを感じました。

それから、高齢の歩行者に関して、歩行シミュレーターで随分いいものができてまいりまして、これもほとんどの県で揃えられて、巡回して体験できるような機械もありましたので、これも積極的に利用されたらどうか。進んだシミュレーターは、ご本人が車を見てどう反応するかだけではなくて、今度ご本人を車で見た時にどういうことになるかという映像を出せるようなシミュレーターがあります。これですと、相手の立場に立って自分がどう見られているか、そういうことも確認できますので、そんなシミュレーターをお使いになっていくのも大事かなと。

お年寄りに関して、今度は自転車の問題ですけれども、自転車のシミュレーターがあり

ますよね。お年寄りが勉強なさる機会に使っていると思うのですけれども、ご存じのとおり、お年寄りの事故、昨日もお話ししましたけれども、実は頭部打撲で亡くなる方が非常に多いのですね。ですから、お年寄りにヘルメットをどのように着用してもらうか、これが非常に重要なポイントではないかなと感じております。お年寄りが着けたくなるようなヘルメットも大事なのではないかと思います。

もう1つ大事なのは、これは歩行者の場合もドライバーの場合もそうですが、多くの地域で三世代交流の勉強会、特に富山県砺波市さんは三世代交流のフェスティバルをなさっているというご報告も昨日いただきましたけれども、特に自転車に関しては、身長とか年齢に合った自転車、最近では若者に特化した自転車が随分ありまして、これなんかはお年寄りが乗ると結構危なかったりしますので、やはり自分に合った自転車をどう選ぶかということも大変大事なポイントなのかなと感じました。

それから、高齢ドライバーにつきましては、きのうも大分いろいろお話をさせていただいたのですけれども、特に80歳以上の高齢ドライバーの事故が多い。操作不適という原因で高齢ドライバーは事故を起こしているというケースが圧倒的に多いのです。その操作不適の内容は、ハンドル操作の不適とブレーキとアクセルの踏み間違いの操作、これが際立って多いわけですね。

ですから、これからはセーフティー・サポートカーも大変大事な安全装置を持った高齢者用の車も出てくるわけですが、大事なことは、なかなかそのサポート技術を生かすことができない。だから、セーフティー・サポートカーとはどういうものであるかという教育ももし機会があればしていただくことが必要かなと。

それから、お年寄りに関しましては、大変重要な違反が一時停止をしないということなのです。実はこれは非常に大きな問題でして、ご本人は、伺うと一時停止をしっかりとやっているとおっしゃるのです。しているつもりなのです。ところが、実際に映像を撮ってみると、ずるずると全然一時停止をしないで、ゆっくりではあるけれども、交差点に進入してしまうケースがあるのですね。

これが非常に難しいのは、ご本人にいくら言葉として一時停止をしなくてはいけませんよ、一時停止していますかと言っても、ご本人はズルズルでも一時停止をしっかりとやっているつもりですから、私、一時停止していますよ、だから大丈夫ですとお答えになるわけです。だから、言葉として一時停止が大事だといくら申し上げても、ご本人はなかなか自分がしていないということに気づかない。

ですから、映像を撮って、そして、あなたの映像はこうですと言って、そのズルズルの

状態を見ていただくのが一番良いのですけれども、これは一人一人それをやるわけにはなかなかいかないものですから、例えば自動車教習所さんのお休みの日に、お年寄りたちが集まって、みんなで運転してみて、そして、チェックしよう。あなたは止まったつもりだったかもしれないけれども、全然止まっていないよと皆さんから言われると、本人は気づくといった工夫も必要かと思えます。

もう1つ、高齢ドライバーに関して大事なものは、実は高齢ドライバーの教育も大事ですけれども、高齢ドライバーはどういう運転をするのかということを一一般ドライバーに勉強していただくと。これが実は高齢ドライバーの事故を防ぐ上で一番大事なポイントなのです。昨日も高齢者マークについてのご報告があったと思うのですけれども、マークを付ける、これは大変大事なことです。でも、なぜマークを付けるのかといたら、私は高齢者ですから、高齢者というのは、例えば車間距離をあけて走る、これが高齢者の走る特徴です。

だから、私が高齢者だということのを車の後ろについているマークで確認されたら、私の車と前の車の間の間隔が少々空いていたとしても、これは高齢者なのだからこういう運転をしている、決してノロノロと運転しているわけではない。だから、そこにいきなり追い抜きして割り込みをするような運転はしないでください。私が今とっている車間距離が私にとって安全の限界で、これ以上車間距離を詰めたら、私はとても怖くて運転できない。そういう高齢ドライバーですからと、そういうことを知らせるためのマークがシルバー高齢ドライバーマークなのです。

つまり、高齢者はそういう運転特性があるということを知らないドライバーの方がいたら、いくら高齢ドライバーマークを付けても全然有効にならない。むしろ年齢が高いということで、良い言葉ではないけれども、それこそばかにされてしまうみたいな、そんな高齢者マークだったら、高齢ドライバーがそれは付けられないほうが良いぐらいだと。だから、高齢者以外の一般の方々に高齢者の運転のやり方を知っていただくこともすごく大事なポイントだなと思いました。

それから、子どものグループに関しましては、これも大変良いご報告を頂戴しました。やはり「交通安全は家庭から」というのは、おっしゃるとおり非常に大事なポイントで、私は、家族でつくるヒヤリ地図というのを盛んに申し上げているのです。ご両親や祖父母の方も加わり、お子さんたちと一緒にその町のヒヤリ地図を作ると、それをきっかけにお子さんたちと交通にかかわる対話が弾みます。それから、お子さんたちがどんなところまで行っているのかなということをお父さん、お母さんがつかむことができる。そんなこと

で、家族でもヒヤリ地図を作ってみるというのも1つの方法かなと思っております。

それから、警察庁さんがファミリー作文コンクールというのをなさっていて、その中で小学校の部や中学校の部がありまして、一般の部もあるのですが、盛んに交通安全の作文を提出いただいて、それを審査させていただく。私は一般の部の審査をさせていただいておりますけれども、こういう機会を捉えて、自分で文章を書いて考える機会、これはやはり非常に参加する機会ですし、こういうものがお子さんたちの安全のために貢献すると思っています。

自転車のことについてもご議論いただきました。これも反射材になりますけれども、自転車で今非常に重要なのは、サドルの前と後ろには反射材が付いているのですが、側面に反射材がないケースが多いのですね。例えば道路を横断した時に、車から自転車が見えないことがありますので、自転車の横、側面の反射材もかなり重要なポイントだろうと思います。

それから、先程高校生が悪質な自転車の運転をしているというお話もありましたけれども、これは折角講習会の制度ができましたので、悪質な自転車の乗り手に対しては講習を受けていただく義務が今あるわけですが、これを受ける方が残念ながら非常に少ないのですね。ですから、とりわけ高校生がちょっと危ない運転をされている時には取り締まりの対象にして切符を切っていただく、それが何枚か重なったら講習会を受けていただく。こういう多少厳罰というか、そういうことも一方で必要かなと。

それと同時に、自転車の保険がやはり大事だと思うのですね。今日お手元に内閣府さんからの資料、全日本交通安全協会さんのサイクル安心保険のパンフレットが入っています。それ以外にも交通管理技術協会からTSマークという自転車の保険があります。それから、自動車保険に付帯している自転車の保険がある。ですから、自転車の保険にできるだけ入っていただくと。

昨日金沢市では自転車保険が義務化になったというご報告をいただきまして、大変嬉しく思います。中には、自治体として保険の料金を経済的にサポートする自治体も随分出てきております。関西の自治体に結構多いのですけれども、静岡市や埼玉県八潮市、それから、最近中央区が自転車の保険に関しては区のほうで1,000円の負担をしますよと。こういうものが全国的に広がっていくと、さらに一層保険に入りやすいことになるのではないかと思います。

それから、運動に関しましては、先程第3グループですか、大学生に中学生とか高校生を指導していただく機会を作ったという話があって、大変良いお話だなと思いました。大

学生だけではなくて、最近交通安全のボランティア活動をする企業が出てまいりました。

これは今日も池田先生のお話の中にも多少あったのですけれども、企業がボランティアをする時は、企業は自分で犠牲を払ったつもりでボランティアをやってもらっているのですが、本当は企業にとって犠牲ではない。確かに企業が従業員に休みを与えてボランティアをやってもらう、企業が何か支出しているように見えますけれども、実はそれは従業員が一番ボランティアをすることで交通安全を守ろうという気持ちになるのですね。

ですから、企業にとって交通ボランティアは支出ではなくて社員の事故が減るという収入なのだよと、このように企業に思ってもらえるような、我々が自信を持ってそれを進められるような、先程の大学生の場合も、大学生が中学生あるいは小学生を指導するのは、大学生も安全意識を高めるのに非常に有効なのだよ。ボランティアという意味を今日池田先生にいろいろご説明いただきましたけれども、そういう中でまた確認して良いのではないかなと思います。

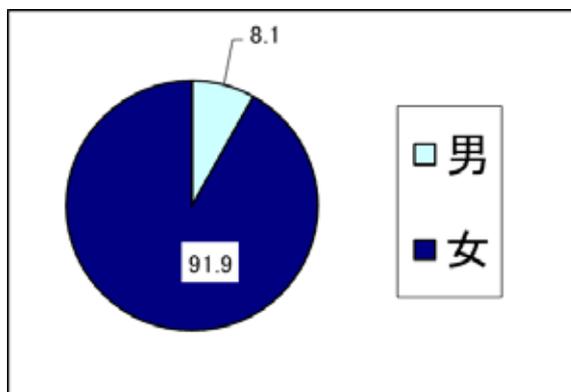
全体的に見ると、自転車に関しては、市民権をどう自転車に与えていくかということが大事で、今日もう1つのパンフレット、これも内閣府さんの「自転車活用推進法の概要」というものがありますけれども、そういった自転車に市民権が与えられると、そのことによってかえって自転車を安全に乗りこなしていただけるという効果も、昨日の金沢市の自転車走行指導帯というお話、大変素晴らしいことです。ああいう形で自転車に市民権が与えられると、そこから安全意識が高まっていくこともあるのではないかと思います。

いずれにいたしましても、本当に今日お集まりの皆さん方が積極的に地域の中でリーダーシップを発揮していただいて、昨日静岡県から後継者を見つけるのが大変だというお話も出たのですけれども、是非とも積極的に後継者育成に励んでいただけるとありがたいなと思っています。

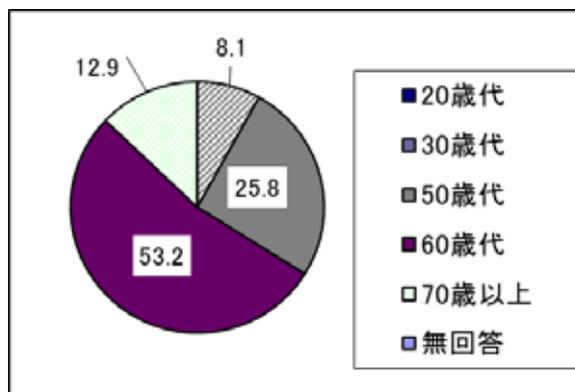
どうも大変ご熱心にご参加いただきまして、まことにありがとうございました。

3. アンケート集計結果

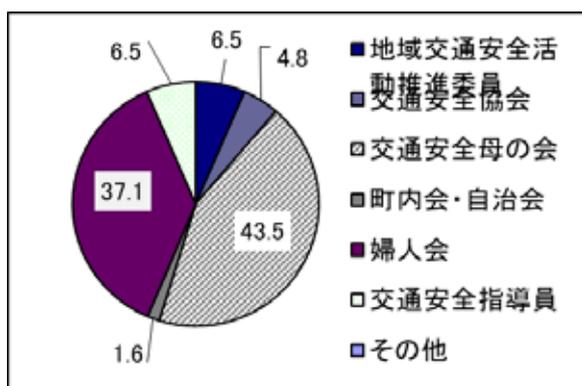
1. 性別



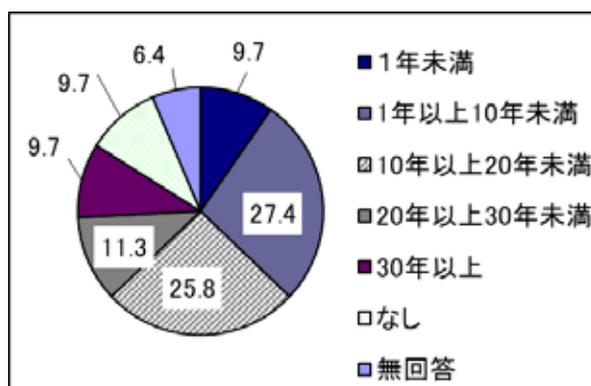
2. 年齢



3. 所属団体

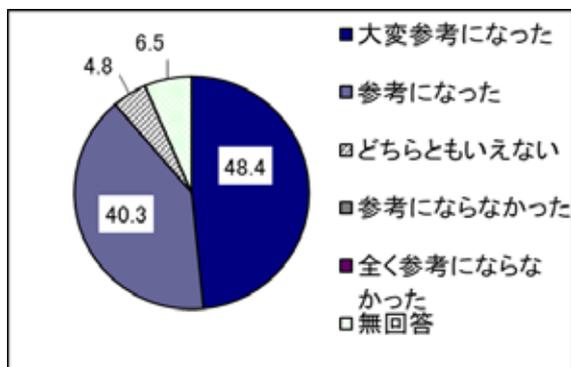


4. 活動年数

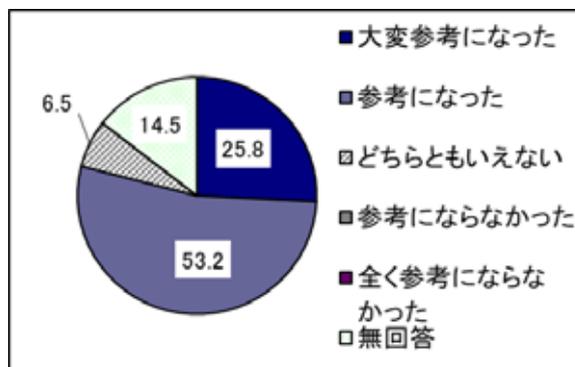


5. 評価

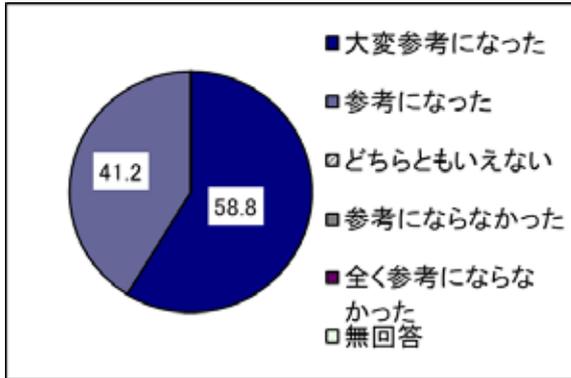
[講演 講師：鈴木春男先生]



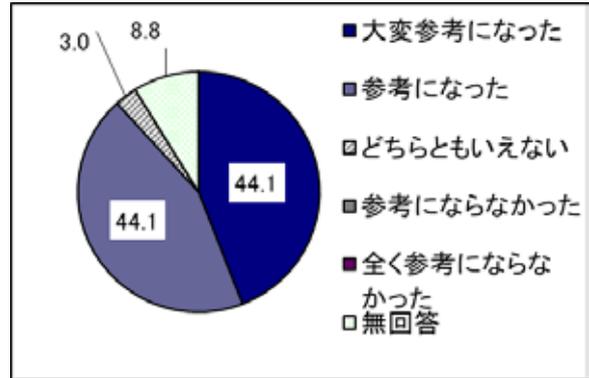
[活動事例発表]



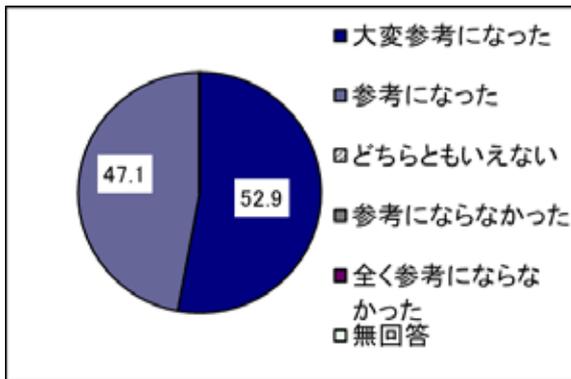
[講演 講師：池田幸應先生]



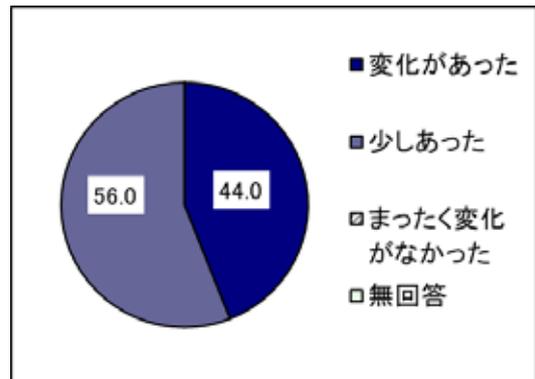
[グループ討議]



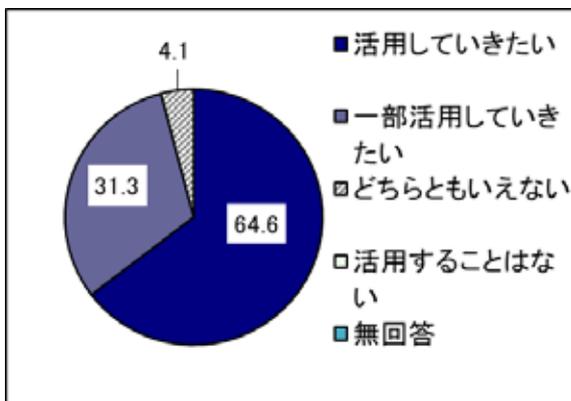
[総合評価] (講習会全体として)



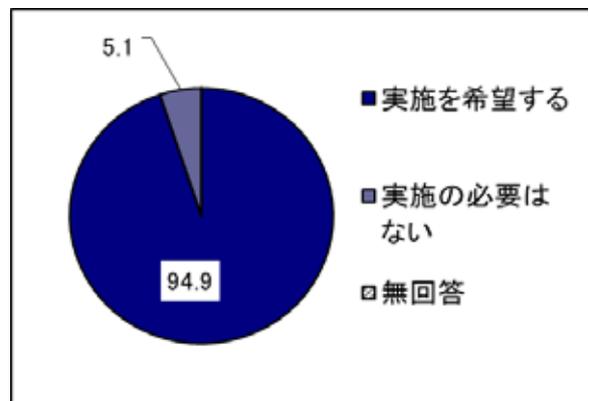
7. 講習会参加による意識の変化



8. 今回学んだ内容を今後の交通安全活動に活用するか



11. 来年度の開催について



6. 今回の内容以外で取り上げて欲しいテーマや内容

- ・ 外国人に向けての交通マナー指導の仕方(2)
- ・ 自転車に関する中・高校生への指導について
- ・ 家庭教育について
- ・ 街頭指導に関する指導要領
- ・ いきいき運転講座等、参加型交通安全講座

9. 交通ボランティア活動に必要な知識や技術を向上させるのはどのような機会か

- ・ 参加・体験(実技)することも重要(6)
- ・ 情報を共有しあえる場(4)
- ・ 指導マニュアル(要領)などがあれば良い(3)
- ・ ボランティアの意義など(2)
- ・ 免許返納高齢者に対する心のケアについて
- ・ 安全マスコットの作り方体験
- ・ 話し方、伝え方講座

12. その他の意見・要望

- ・ 全体を通じて時間が不足気味(講演は、もう少し長くてよい)

4 . 記録写真



開会挨拶（内閣府 小野田政策統括官）



講演 鈴木春男先生



活動事例発表



講演 池田幸應先生



グループ討議



グループ討議発表